

---

# 仄馨

晴井 雨菜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仄馨

### 【Nコード】

N0649P

### 【作者名】

晴井 雨菜

### 【あらすじ】

「あんまり飲み過ぎるのは良くない、お持ち帰りされても文句は言えないからね」——無理矢理奪われた唇は、なぜだか拒否なんてできない。綺麗な瞳で見つめないでよ、なにも言えなくなるから。そんなに愛をささやかないでよ、止まれなくなるから。だから言葉よりも熱くてとろける、キスがいいの——。

## P r o l o g u e

与えられた今、だから。

決してそれは過去ではないのだ。

いま、この一瞬を神様に与えられ生きているから。

だから、私たちはここにいます。

ときにつらい現実には耐えきれないこともあるけれどそれでも前に向かって歩くのは、私たちが神様と約束しているから。

?????どんなときでも前を向いて生きる、と。

それが私たちが支払う、対価。義務。あるいは権利かもしれない。

だから、私たちは生きている。

生きていること、それはかけがえのない、何にも勝るP R E S E  
N Tだとはおもわないだろうか？

私はそれをだれよりも大切にしたい。

そう、あなたと一緒に。

?????P r o l o g u e

仄ほのか馨



## 二点と線（1）

「あ、衣幡<sup>えぼた</sup> 柳<sup>りゅう</sup>だ」  
「は、だれそれ？」

私がそう呟くと隣にいる八重は私は聞いた事無いわよ、知らないわよ？ とでも言いたげな声を上げた。

「ほら、この雑誌に載ってるの。見る？」  
「見るー」

さっきから雑誌にしばらくかじりつきだったお詫びもかねて、私の見ている雑誌を八重に差し出した。

その差し出したページの見出しは、『世界的企業のイケメン社長に突撃！』とかなんとか。経済誌ではないからただのミーハー向けのものに、写真すら載ってないんだけど。

この世界的な不況の中。現在は衣幡 柳率いる一部上場大企業ミナモは世界の自動車シェアナンバーワンだ。

ちょうど四年前だったか。そのミナモがアメリカでリコール問題を引き起こした。そのリコールは小さな問題にとどまるだろうと踏んでいた前ミナモ社長の桜庭氏は、その対処を遅らせてしまったのだ。

結果、長年車業界においてシェアトップを守って来たアメリカにとって、ミナモのリコール対応遅れは格好のネタとしてマスコミに

叩かれた。

——ミナモは人命を優先しないのか？

過去の栄光にしがみつくプライドからか、それともミナモを通しての日本への嫉妬なのか。おそらくはその両方だろう。バッシングは過剰にまで熱し、ついには政治機関までもがこの問題に口を挟もうとしていた。

いま思い返せばひどいバッシングをしていたマスコミも、桜庭氏の議会召還をと叫んだ議員も、ミナモの前にシェアナンバーワンを獲得していたアメリカの車会社に金で操られていただけかもしれない。

考えれば当然だろう。ミナモの信用失墜を喜ぶのは、まぎれもなくその会社なのだから。

そしていよいよ収集がつかなくなってきたときに、当時社長だった桜庭氏が引責辞任を発表したのだ。

——すべては私が判断を誤ったことにある、と。

私は失望した。

世界一まで昇りつめたこの創業家の社長までもが、マスコミごときに潰されてしまうのか、と。だからその同じ会見で桜庭氏の後がまとしてプロフィールのみ紹介された当時二十六歳の衣幡にも若干のマイナスイメージを覚えたのだ。

当然マスコミが食いつかない訳が無い。

なぜ顔を公表しないのか、と問えば必要がないからと答えられ、相当面白くなかったのだろう。

マスコミにあおられ、世間も衣幡に苦言を呈する。

『たかだか二十六の若者に、この危機が脱せるのか？』『イケメンと噂？ いやいや、噂だけじゃ乗り切れないよ？ なんせ顔をみせる必要がない、だっけ？ あはは』

連日ワイドショーでは嘲笑とともにコメンテーターたちの格好のカモ。しかしどれだけ批判されようと衣幡は一切顔を表には出さなかった。

しかしその批判は長く続く事は無かった。

なんと桜庭氏があんなにも手こずっていたリコール問題の収集を、衣幡はいとも簡単につけてみせたのだ。その手腕は高く評価され、彼の行った社内改革の一環や、意識改革は連日テレビで取り上げられ、コメンテーターたちは手のひらを返したようにその評価を一変させた。

これが四年前にあった事。

私はちょうど高校二年だった。

彼のおかげで政治経済、さらには経営にも興味がもてるようになり、悩んでいた進路も決定していまは無事に大学三年生だ。

受験も死に物狂いで頑張って、受験生からは難関大、世間からはまあ一流とよばれる所に合格した。

「へえー、エバタ リュウね。ミナモの社長さんかあ。二十六歳でソレをまかされちゃうんだからすごい人なんだね。……うわー、六歳までをイギリスで過ごし、そこから十歳までをイタリア、フラン

ス、ドイツを転々と生活。アメリカの某一流大で経営を学び、飛び級で十六歳で卒業。操れる言語は英語、イタリア語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、中国語、日本語の七カ国語だってさ。大天才だね、この人」

八重が感心しながら雑誌を私に返してくれた。

「私は花実<sup>カサネ</sup>がドイツ語と英語話せるだけですごいと思ってるのに、この人ってばその倍以上だよ？ 次元が違うわあゝ」  
「たしかにね」

苦笑しつつ雑誌をバッグにしまう。

大学のカフェテリアは外れた時間だからだろうか人が少ない。でもパソコンで資料を整理したり、読書をしたりしてる人はちらほらいる。

目の前にいる八重はアイステイーを飲んだのんびりしている。……はずだったのに、なぜか彼女は獲物を見つけた猛禽類を彷彿とさせる目をこちらに向けて、にっこり笑っていた。

——まずい。非常にまずい。

こんななにっこり八重が（男の前以外で）笑うなんて、なにかやましいことを考えてるに違いない！

「ねえ、いま友達からメールでね？」

「う、うん」

「合コン二人欠席だから、助っ人してくれない？ って言われてね？」

「あゝ。そうなんだ」

「私のお願ひ聞いてくれるよね？」



「と、時と場合による……」

「え？ なに？ 八重様のお願いなら喜んで聞きますう？ ありがとう、花実！ さっすが親友！」

語尾にハアトがつきそうなほど可愛く、強引に押し切られ。というより、強引すぎる、このB型女め。

「あ、もしもし？ おっけーおっけー、私の友達も快諾だったから！」

快諾、と同時にもの凄いメヂカラで見られたらもう首を横に振る事は出来ない。そんなことは八重の計算のうち。もちろん私が合コン嫌いなことも十分承知している上での、確信犯。

そして電話を切った八重が満面の笑みで私に向き直る。

「聞いて！ 今日のメンズはなんとアノ、宝持大学理工学部ほうじのイケメンたちだって！ 将来超有望だよ！」

「イケメンかどうかはわかんないじゃん。それに将来なんて――――」

「あー、はいはい、夢がないこと言わないの。じゃあ、私用事あるから五時にまたここね。ちゃんと化粧してきてよ？ いつもの三割増しでね」

そう言って機嫌良く八重はカフェテリアに私を残して出て行った。

## 二点と線（2）

午後六時、私は大学近くのカラオケに連行されていた。

五時に八重からの集合の命令を受けた私はせめてもの反発から精一杯やる気の無い格好をして行った。つまり、ジーンズにTシャツ、スニーカーに、ノーメイク。これでだれも話しかけてこないだろう、と思ったけれど。

でも私より八重の方が一枚上手だったらしい。

私を見るなりトイレに引っ張り込んで副を渡してきた。薄いピンクマキシ丈のドレス、グレーのニット。なるほど、オフショルダー。

『ほら、さっさと着替える！』

着替えればはい、と茶色いブーツを渡されて。もう私はあきらめモード。丁寧に髪を巻かれてメイクをされれば。もう合コンにいても違和感ゼロのかわいらしい感じに大変身。

「えっと、水上<sup>みなかみ</sup> 八重<sup>やえ</sup>っていいいます。よろしくお願いしまあす」

私と八重、それからあと私の知らない他の学部の子。男の子たちも五人で同じ人数。

ハートが語尾にきらきらしている八重の後に私がしゃべるなんて、温度差ありすぎて皆引きそう。

「あー。たちばな かさね橘 花実です。……よろしく、おねがいします」

あとからよろしくのくだりを付け加えたのは、横の八重から男の子たちに見えないように足を蹴られたから。痛い。

一通り相手の顔を見渡すけど八重の言ってた「将来有望イケメン」はいいのかな。言っちゃ悪いけど、「将来有望、かもしれない普通の人」の方が彼らの形容としては妥当だとおもう。

そして八重との約束で四十五分したら帰って良い、とのことだったので。私はずーっと我慢をした。

こんな用事のないところにずっといなくちゃいけないっていうイライラが顔に出てたらしくて、男の子たちも必要以上に話しかけてこようとはしなかったし、私もそれはそれでありがたかった。

耐えて、耐えて、ため息、ため息。

ふう、と何回目かのため息を吐いた後に苦笑顔の八重から、オツケーサインが出て私はそそくさとその場をあとにした。とくに仲良くなった人もいなかったし、だれも私を引き止めなかった。

はー、とお腹のそこから息を吐いて。

それから時計を見て、バーに行こうときめた。

こんな日はお酒を飲まないとやってらんない。すごくむかむかする。

ザルでもないけれど、下戸でもない私はお酒が程々に好き。あの、一瞬の高揚感がなんともいえない。

電車に乗って目的の駅で降り、五分か十分歩くと私がいつも行っているバーがある。

からんからん、とノスタルジックな音とともに店内に入ると「いらっしゃいませ」と落ち着いた声が聞こえて来た。ああ、安らぐ。

「こんばんは」

「ああ、花実さんでしたか」

挨拶をすると柔らかいマスターの声と笑顔に迎えられる。落ち着いた雰囲気の良いマスターがいるこの場所は私の憩い。

「マティーニくださいな、マスター」

「かしこまりました」

マスターがカクテルを作り出したのを確認して。それをゆっくりとながめる。確かめたわけではないけれど、マスターはすごく若い気がする。たぶん、三十いくか、いかないくらい。

いつも私が強いお酒を注文すると、「花実さんが飲んでも酔わない人ならよこんで」とかわされてしまう。それはマスターの優しさなんだろうけれど、やっぱり飲んでみたい。

だからそれ以来、虎視眈々と狙っている。

「おまたせしました」

「ありがとうございます」

うん。やっぱりマスターの作るお酒はおいしい。

「マスター、私アースクウェイクが飲んでみたいの」

「おや、花実さん。もう酔いましたか？」

ひらり、と私の注文をかわしてしまう。

アースクウェイクとはその名の通り、地震。

二、三杯飲むと足元がふらつくと聞いた事があって、飲んでみたのに。

いくら注文してもマスターはノーしか私に出来ない。

じとり、とマスターを見ているとまた何かカクテルを作り出した。こうお酒を注ぎ入れる手の感じとか、目線の向く先だとか。ただ無造作に作ってるだけではないのが、マスターの良い所だと私は思ってる。ちゃんと魅せて作って、それまでが注文って感じ。

低くジャズがかかる店内、間接照明でこの雰囲気。手早くでも綺麗にお酒をつくるマスターはモテるに違いない。だって、この容姿だもの。短い黒髪を遊ばせて、切れ長の目とその笑顔。うん、学内にいたらイチコロだな。

「ドリームです」

「へ？ 私、頼んでない……」

「あちらの方が」

マスターが指し示した方に居るのはスーツを着た男の人。

さっきコンタクト外したからよく見えないけど、なんとなく雰囲気気が落ち着いてて、でも若い。うーん、マスターと同年くらい？

「え、あの」

「俺が好きでしたから、気にしないで」

四つとなり座っていたその人は私の隣の席までやってきた。

さりげなく腰かけて、話しかけてくる。

その隙の無いカンジ。お酒をもらうなんてはじめてだし、どうしてらいいか分からなくて、頭が真っ白になる。

「こんなに可愛い女の子が『アースクウェイク飲みたい』なんて言ってたから驚いてね。……ひとりで飲んでいるならあまり強いものよりも飲みやすいカクテルを飲んだ方がいい」

「どうして、ですか？」

私が戸惑いながら話しているのが分かったのか、くすくすと笑いながら彼は話す。でもその空気で伝わる低い笑い声が、今まであつて来たどんな人とも違う気がして、どくりと心臓が疼いた。

ああ、なんて、心臓に悪い人。

「ひとりで飲んで酔ってしまったらお持ち帰りされても文句はいえないよ？ バーの中ならマスターが彼が睨みをきかせているからそんなことはできないけれど、外なら話は別だしね」

「五鹿央さん、ほどほどにしてください」

マスターが私が困っているのを見かねて会話に入ってくる。とたんに私は自分の方から力が抜けるのが分かった。

横に居る彼は「祥哉は厳しやうやしいな」と笑いながらグラスのお酒をあとっていた。それから「アースクウェイク」と私がいくら頼んでも作ってもらえないカクテルをマスターに注文していた。

マスターがお酒をつくる様子を愉快そうに見つめる彼に私はおずおずと声をかける。

「あの、お名前、お聞きしてもよろしいでしょうか？」

「ああ、申しおくれました。俺の名前は五鹿央いつかおう 柳りゅうといいます。よろしく」

「私は橘 花実です。よろしくお願いします」

私が自己紹介すると「カサネってどんな字なの？」と聞いてきたので、バッグからメモ帳を取り出して花実と書いた。するとなるほど、とした顔で「意味ってあるの？」と聞くからなんだかおかしくなって少し笑ってしまった。

なんでも疑問に思う事を訪ねてくることが小さな子供のようで、自分の興味がある事をきくと正直に言える人なんだろうなあと感じてしまった。

「『花も実もある』という言葉からとった名前みたいです」

「なるほど、情理を兼ね備える人ということか」

みたいです、と返すと目を細めて見つめられてしまった。頬が赤くなってしまいうちがしてうつむいたら、笑い声はしなかったけれどなんだか笑われた気がした。

「イツカオウさんのお名前はどんな文字なんですか？」

「俺？ そっか。確かに五鹿央なんて名字は少ないもんね」

そう。イツカオウなんて名字はいままで見た事も無かったし、聞いた事もなかった。よっぽど珍しい名字なんだろうと思ってなんと

なく興味がわいた。

でも、それにしても目の前にいる彼の反応はあまりにも不自然かもしれない。だって――――

「はい、これ」

「あ、ありがとうございます」

ふっと現実に戻されて目の前を見るとイツカオウさんが私に名刺を差し出していた。受け取って見ると“五鹿央 柳”と書かれていて、私ははじめて見るその名前に驚いた。

名刺は名前だけのごくごくシンプルなもので、多分プライベートなものなんだろうと見当をつけた。

「名字じゃなくてお名前の方はこんな字なんですネ。私の懂れている人と同じ字です」

「……懂れ？　なんて人？　知ってるかもしれない」

「五鹿央さんご存知かもですが、ミナモの社長さんの衣幡 柳さんです。彼が社長に就任した時は世間みたいに私も不信感を覚えた事がありましたけれど、すぐに会社を建て直したあの方は本当にすごいなあ、と知っているんです」

「……ふーん」

その、声は。その返事のような相槌は。一寸前の会話とは似ても似つかないような、そんな冷たさをはらんでいるように一瞬感じてしまった。

けれど表情はさっきとなら変わりのないものだったから。ただの勘違いだろう、と私は結論づけた。

「あの人、ってさあ。どこかすごいところあったっけ？　衣幡 柳



なんて、ただ金儲けしてるだけじゃない。裏で何してるかわかんないよ？ あんなにお金お金って稼いでるんだもの。黒い話の一つや二つ普通かもしれないし……。花実さんもそんなにお金儲けしたいの？ 彼の手法ってそんなに尊敬するものだったかなあ」

やけに、話に踏み込んでくる。しかもマイナス方面に。けれどなんとなく、これは彼の本当な気がして。だったら私も本当のことをいわなければならぬと感じて。率直に、私が思っていることを彼に言った。

「いいえ、私が衣幡 柳さんを尊敬しているのはお金儲けに関してではありません。ありすぎるお金はただの紙くずと同じですから」

それは私の率直な意見だった。

三年間学んで来た経済学を通して、独学で学んだ政治学を通して。それを私は学んだ。ありすぎるお金は不幸を呼ぶし、使い道の定まらないカネは黒い道へ人を引き寄せる。

「じゃあ、なんで？ 彼なんてお金儲けがすべてだと……」

「私、彼の名前がテレビに出るようになった頃、未来の進路が全然見えなくて。でも彼がミナモトの問題に取り組んで会社を建て直すまでのそのプロセスから経済問題、政治、経営とかいう方面の問題に興味を持てるようになったんです。だから、衣幡さんは憧れというか、——尊敬します。私もいつか、彼が私にしてくれたみたいに誰か悩んでる人のなにかを決めるお手伝いが出来れば、って思ってるんです」

「ああ、そう……なんだ」

そうなんだ、と消え入りそうな声で呟いた瞬間の五鹿央さんの顔

はよく見えなくて、でもマスターが笑ってたいたから怒ってはいなかったとおもう。

頭を抱えるようにテーブルにもたれかかって、笑っているようなでも怒っているような、そんなどちらともわからない雰囲気を出していた。

しかも私にとってはどこか既視感のあるそれはなんだか手を差し伸べてあげたくなるような儂げな印象を与えた。

五鹿央さんのグラスはすでに空になっていて、マスターはまた何かお酒を作っていた。

「柳、ほら。コサック」

「ああ、……サンキュ」

マスターが五鹿央さんの目の前においたのはコサック。これも相当強いお酒のはず。大丈夫なのかなあ、と心配しているとマスターがそれに気づいたように私に笑いかけてくれた。

「彼はザルを通り越してタガなので大丈夫なんですよ。酔いません」  
「——そうなんですか」

そういえばさっきもマスターは五鹿央さんのことを「柳、」と呼んでいた。もしかして知り合いなのかな、と思っているとふと明日はヒトコマ目から授業が入っていることを思い出した。最悪。

「マスター、私帰りますね。……五鹿央さん、今日はお話できて楽しかったです。またここで会うことがあったら声、かけてくださいね」

「ああ、こちらこそありがとうございます。そうだね。――また、花実さん。君が気づいてくれると信じて」

「……………はい？　じゃあ、失礼します」

お店で会ったら気づく、ってことかな？　と多少の違和感を感じながらも自分を納得させて席を立つ。

お会計をしようとするマスターが「柳に払わせるから、今日はいいよ。急いでるんだろう？　早く帰った方がいい」といってお金をもらってくれなかったので、五鹿央さんによろしくと伝えてください、とだけ言って店を出た。

月が綺麗に雲間から見えていて、なんだか気分も晴れたような気がした。

## 二点と線(3)

\*\*\*

あれから一週間が過ぎようとしていた。その間、一度もバーには行かなかった。それなりに忙しくて、そこまでの余裕ができなかったから。

「はぁー、怒濤の一週間だった」

「だね。バイトに突然のレポート、それにサークルも！　もう週末動けない……」

レポートを出した教授は出欠を重視しない。そのかわりにテストは無理難題を突きつけてくることで有名。出欠を重視しない、につられて選択したわけだけでもうなんていうか。

この間のテストもひどかった。ぺらり、と白紙のA3を渡されて、「講義をふまえて、現状の世界経済について」なんて。幸い私はそんなに欠席しないし、したら講義の録音を聞かせてもらったり、ノートを見せてもらったりしていたから平気だったけれど。

そんなわけでこの今週レポートを要求して来た教授だけは外せないのだ。だってテストで点をとれる保証がないから、日々蓄積していくしかない。

やっこのことで書き上げて教授のアドレスに送信終わったときには自分を褒めたくなった。

「あー、週末ダラダラしたい」

ダラダラ過ごすためには予定の確認が必須。バッグをテーブルの上にどさりとのせて手帳を取り出した。

ちなみにここは大学近くの穴場カフェ。小さなお店なんだけれど安くて質がいい。量もこれだけあれば女子は十分という都内にしては良心的なお店。やっぱり学校が近くにあるからかな？

うん、よし。土日とも休めそう。今週バイトのシフトを融通したから土日は休ませてくれるって言ってたし。

おし、決定！ 今週末はどこにも出かけな———

「あれ？ 花実、この挟まってるメモっぽい紙、なに？」

「え？ どれどれ？」

手帳の土日欄に“なにがあっても出かけない”と書き込み始めようとした瞬間、八重が私のバッグを指差した。

淡いピンク色のお気に入りバッグ。お財布とお揃いのもので、高かった。そのバッグの外側にあるサイドポケットに見覚えの無い白い紙が挟まっている。

なにかな、とおもって引っぱり出してメモをよく見ると、十一桁の数字とメールアドレス。

そして、綺麗な見やすい字体で書かれた、おとぎ話をはじめ一文みたいな。

———君は、一体いつ気づいてくれるんだろうか？

そしてわかった。

走馬灯のようにあの日の出来事が頭を巡った。

『ああ、こちらこそありがとう。そうだね。――また、花実さん。君が気づいてくれると信じて』

あの日、バーでの別れ際。五鹿央さんが発したあの言葉の意味。バーでまた会った時のことを言ってるのだとばかり思ってたけれど、本当は違くて。

本当はこのメモに、という意味だったのに。

そうだったんだ、と思うと同時にさあ、と顔が青くなっていく気がした。

「花実？　なんだったのそれ」

「どうしよう。連絡先もらってたのに、連絡してない……」

「え！　貰ってからどれくらい経ってるの？」

「い、一週間くらい？」

八重が嬉々として話に入ってくる。色恋の話以外にこうやって興味を示すのは珍しい、なんて失礼なことを考えているのに、その八重に意見を求める私も私だ。

「花実、いますぐ連絡した方がいい。出来れば電話で！　ほら、はやく！」

「えー、電話？」

「は、や、く！」

あんまり気が乗らない。

だって、私が電話してもいいモノなのこれって？

たまたまバーで知り合ってお話したただけなのに、一回マスターにどうすべきか相談してからの方がいいかな。でも、でもでも。うー、

あー。

連絡してほしくない相手に、番号なんて渡さない……よね？

そう自分を説得して、思い切って0、8、0、とダイヤルをおす。十一桁の番号を押して、呼び出し音を聞いて、相手が電話に出るのを待つ。ちようどお昼だし、働いてる人もそれは同じだね。

『……はい』

どくり、と心臓がはねた。

あの夜に聞いた声と同じトーンの低い声。

どうしよう、どうしよう、頭が一瞬で働かなくなる。

『あの？ 失礼、どちらさまでしょうか？』

本当に五鹿央さんだと感動して、頭が真っ白になって、声を発することが出来ずにいたらいぶかしんだ声で再度返事を催促された。  
ああ、いけない、とおもって慌てて声をだす。

「あ！ あの、五鹿央さんですよ……？ えっと橘 花実です。覚えていらっしやいますか？」

『——ああ、花実さんか。いつメモに気づいてもらえるかと待ってたんだよ？』

くすくす、と含みながら笑うその姿が容易に想像できてしまって、それだけで顔が赤くなる。彼の心地よい声、電話は耳元に直接響くから、心臓に悪い。

「ごめんなさい。全然気づかなくて。いま気づいたんです」  
『本当にいま？ それは傷つくなあ』

からかうような声でけたけたと笑う。こんなに笑う人なんだ、と意外なところをみつけて頬が緩む。それをさらに緩んだ顔で見ている八重には気づかず。

「ごめんなさい」

『ふふ、じゃあね、お詫びに明日つきあってよ』

ええっ、と言おうと思ったら電話の後ろで「もう時間が……」という違う人の声が聞こえて。お仕事忙しいのかとおもったら、何も言えなくなってしまった。

その沈黙を肯定に受け取ったのか五鹿央さんは『明日の十一時に、あのバーの前に迎えにいくよ。あと書いておいたアドレスにメールしておいて』とだけ言って電話を切った。

「電話の相手の人、なんだって？」

にたにた、と形容するのがふさわしい八重がすでに私をからかう体制にある。ああ、恥ずかしい！

「明日の、十一時に……待ち合わせ？」

「わー、デートだねえ？」

答えを見切っていたかのようなその八重の棒読みに、なぜだか自分が激しく滑稽に思えた。



## 判別式D（1）

結局人はどんなに忙しくても、どうしようもない状況が差し迫って来たらきちんと順応するのである。どんなに眠くても破れない約束ならちゃんと目が覚めるし、リラックスしていても心の一番奥底ではどこか緊張しているのである。

それは自分にも当てはまることを、私は知っている。

——白いレースドレスにナポレオンジャケット、黒のニーハイブーツ。ちょっと色味にかけるかとマリンスカーフをプラスして。バッグはバーバリーのシックなチェック。よし。これなら五鹿央さんのとなりにもおかしくない、はず。

ふう、とひとつため息を吐いて落ち着く。一応十分前にはついた。前に立ってみるとわかる。夜とはこのバーの雰囲気がいぶん違っている。

夜は他のどんなお店よりも存在感があるのにいまはそれが嘘のよう。むしろ小さいくらい。

お店の前の通りは車がせわしなく行き交っているし、やっぱりいつもとは違う。……調子も狂う。

そうだ、車といえばさっきから反対車線の路肩に止まっている車。黒いその車は私でも知っている有名なメーカーの。

うーん、メーカーって言ったら失礼か。どちらかというともう一種のステータス、ブランドとして認知されてるようなその車。

あ、走って行っちゃった。

いいなー、一生に一度でいいからああいう車に乗ってみたい。  
だってさ？　どうなってるのか興味ない？　普通の車よりシート  
はふかかなのか、とか、すごい機能がついてるのか、とかね。

でも時代はハイブリットカーだからなあ。

とか思っているうちに約束の十一時。五鹿央さんは未だ来ず。

時間にルーズな印象はなかったけどな、と無意味に携帯電話をば  
かぱかしてみるけど来ないものは来ない。

そんな私を通行人がみてる気がするけど気にしない。ぱかぱかば  
かぱか。―――にしてもさっきから私の少し前に立ってる人がガ  
ン見してくる。なんなんだ、と顔を上げると満面のからかいの笑み  
を浮かべた五鹿央さんだった。

「五鹿央、さん……っこんにちは」

「こんにちは。いつ気づくかなって思ってたのに全然気づかないし。  
おもしろかったなあ」

「面白いってひどい……。いつから見てたんですか？」

「十分くらい前かな？」

「十分って、それは嘘でしょう？　いくらなんでも十分もそこにい  
たら私でも気づきますよ」

「嘘じゃないよ」

くいくい、と手招きされて。それに引き寄せられるようにして私  
が五鹿央さんのもとにいくと、五鹿央さんはすこし笑った。

彼の横におさまって「これなんだ？」と指されたものを見て驚い  
た。

「この車に見覚えは？ お姫様？」

ふぎけながら私に尋ねる五鹿央さんが示したのは、私が反対車線の路肩に見ていた車だった。あの、一度は乗ってみたいとさっきまで考えていた車。

「これって……」

「花実さんがずっとこっちを見てるからもうバレたのかな、と思ったけどそうじゃなかったみたい？ お姫様お迎えにくる王子様がみすばらしい馬車だとまぬけだろう？」

あきらかに私をからかっていると分かる声音で明らかにおもしろがっている。

たしかに五鹿央さんはカッコイイし、確かに王子様っぽいんだけど。なんだかからかわれっぱなしは嫌、じゃない？

「あれ、王子様って誰のことですか？」

「花実さんの王子は俺じゃないの？ 王子様はカッコいいって相場は決まってるし」

「し、つ、れ、い！ カッコイイ王子様って一体どちら？ 見当たらないんですけど？」

ふふん、と勝ち誇った顔をしていると呆然としている五鹿央さんの顔が目に入った。……あ、やばい？もしかして私ふぎけすぎた？ 気分悪くした、とか？

「……あの、五鹿央さん？」

「え、ああ！ ごめんね、飛んでた」

「気分悪くされましたか？ すみません、調子に乗りました」

私が謝ると五鹿央さんは一瞬なんのことだか分からなかったみたいで、間を置いてから「や、いや。違うんだ!」といきなり慌て出した。そしてとりあえず車に乗って、と私を助手席にのせ、自分も運転席に乗り込んだ後に少し歯切れ悪く話を始めた。

「あの、ね? 恥ずかしいんだけどね。この年になるまで容姿に関しては褒め言葉しか言われたことがなくて。遠回しにも今みたいに『かつこ良くない』とかは言われたこと無くて。それで、その、さつき花実さんにあんなこと言われたのはじめてだったから、なんか嬉しくて」

「え? ……嬉しいってどうして」

褒めてなんか、ないのに。どうして?

「うーん、色々あるということ」

それを話したあと五鹿央さんはすこしもしゃべらなくなった。ずっと車を運転していて、行き先も教えてくれない。ただほうけているだけの気がしないでもないけれど。

そしてかれこれ一時間経って、もうお昼も過ぎたし。首都高をぐるぐるしているだけだし。私でもわかる。だってさつきここ、通ったもの。

上の空。

どうしようかな、と無い頭で考えた結果、思い切って話しかけることにした。

「あのー、五鹿央さん? どこに向かっているか教えていただきたい

いんですけど……」

「……ごめ、あー、俺今なんにも考えてなかった」

———ですよね。

「そっか、もうお昼か。なにか食べようか？ リクエストある？」

「そうですね、……じゃあ、五鹿央さんの——」

「ねえ、」

「あ、はい。なんですか？」

運転しているためこちらに視線は向けられていないのに、なぜか体が見られていると錯覚する。カッと体が熱くなる。よくわからない、この感覚。

「俺のこと、柳って呼ぼうか？」

これのことを予期していたなんて思わない。

けれど、なんとなしに彼がいうその言葉に少しも体が反応しなかったといったら嘘になる。そう、真っ赤な嘘。

運転しながらにこりと笑っている五鹿央さんの顔、その横顔。余裕を感じられない気がする。いつも漂う、無敵というか、達観した感じのその、余裕が。

なにに対して彼はいま、焦っているのだろうか？

それにしても未だに五鹿央さんの年齢を知らない。名前しか、知らない。

けれど確実なのは私よりも年上だっていうことで、なんとなく年上の人を呼び捨てで呼ぶことは勇気が必要なことで。

ちら、と五鹿央さんを盗み見るとなにか考えているようだった。

すると私の携帯電話が小刻みに震え出す。

ブー、ブー、と私に着信を知らせるそのサブ画面を見ると幼馴染みの名前が表示されていた。

「あの、電話出てもいいですか？」

「どうぞ」

カーブにさしかかったためこちらをみないで五鹿央産はこたえた。

「もしもし？」

『——っカサネ！ 早く出ろよ、アドルフが苛々しだすだろ』

「ごめん、ユウ！ アドルフにかわって？」

アドルフというのはアドルフ・ロード・ラミジェというドイツからの留学生。まだまだ日本語が不自由なのに喋ることが大好きで、たまたまドイツ語が出来る私と偶然出会って、言葉が通じないことでたまるストレスを週一で発散している。

いつも大抵土曜か日曜に電話がアドルフと同じ学部のユウ——幼馴染みの桐谷 きりたに 佑二 ゆうじ——からかってくる。

『《花実？ 先週言ったじゃないか、お昼ころ電話するからって。忘れてたの？ ひどいなあ》』

《ごめんなさい、アドルフ。いま出かけてるの。だからあとで家に帰ったらまたかけ直すから許して？》

『《かけ直すって、……俺の携帯電話に？ 花実が？》』

《そう、アドルフに、私が》

いままでは「お喋り好きなアドルフに花実の番号を教えたら、ドイツ語で話しくって語学の勉強にならない」っていうユウのアドルフへの愛のムチ作戦でアドルフは私の携帯の番号を知らなかったんだけど。

今回は私にもちよつと非はあるわけだし。番号を教えるくらいなら、ね？ ああ、もちろん緊急時以外週二以上で電話して来たら着信拒否っていう条件はつくけどね。

《じゃあまたあとでね、ばいばい、アドルフ》

《またなー、愛しのカサネ》

ぶつ、という音。

さよならをしてからすぐに通話を切ったのはアドルフの機嫌が良  
い証拠。

まったく、単純なんだから。

「すみません、電話終わりました」

《随分流暢なドイツ語だったね、相手は恋人かな？》

五鹿央さんが日本語でなくドイツ語で返して来たことにも多少驚いたけれど、それ以上に“恋人”と聞こえた自分の耳を疑ってしま  
いそうになった。

だってアドルフが恋人？ ないない。地球がひっくり返っても無  
い。

「電話の相手——アドルフは恋人じゃないですよ。ただの大学の友  
達です。他学部の留学生でまだ日本語が不自由なんでたまに相談に  
乗ってるんです」

アドルフは「俺は英語も出来る」って言い張るけど、ドイツ語訛りの強すぎる彼の自称英語は私でも聞き取りは微妙だ。

だからましてや英語勉強中の人には、おもいきりドイツ語にしか聞こえないはず。きつときちんと英語として認識できるのはThank youとかHelloとか、耳慣れたワンフレーズだけだと思う。

「……大学ってなに？」

「……？ 私の通ってる大学ですけど」

なにを言ってるのだろうこの人は。

きよとんと五鹿央さんを見る私。そしてその視線を固まったまま受け取る彼。

たっぷり十秒くらい沈黙が流れ、そして五鹿央さんは長い長いため息を吐き出した。

「……ずっと、どこかの会社に働いてる人だと思ってた。――や、老けてるとかじゃなくて、」

「……五鹿央さん、墓穴ですよ？ ふふ、嘘です。私ドイツ人とのハーフなんでよく老けてみられますし、慣れてるんで平気ですよ」

にっこり、と笑って言う五鹿央さんは緊張が解けたような表情で目元を緩ませていた。それと同時に肩が脱力したのを私は見逃していないけれど。

それでも私に悪いと思っているらしく五鹿央さんはこちらをちらりと見た後にアクセルを踏み込んでスピードを出した。

そのスピード感と次々と変わって行く景色が気持ちよくてドライヴが好きになりそうだなと無意識に顔が緩む。



「じゃあ、お詫びにお詫びに俺がオススメのところに  
お昼ご飯食べに行こうか」

「はい」

## 判別式D(2)

お昼に案内されたレストランは有機野菜を使った料理がおいしいと評判の店なんだよと、五鹿央さんは教えてくれた。

たしかにサラダに使われている野菜がとてもおいしくて。私は特に水菜がおいしいなあと思った。五鹿央さんはそのときの私の緩んだ顔を見て、声を出さずにくつくつと笑い、少し私をむっとさせてくれた。

そしてお会計をするときにどうして彼があんな些細なことに対して”お詫び“という表現を使ったのかを理解する。

———ああ、気を使わせなかったためか。

当の私はお詫びというキーワードはとっくに忘れていて、私がお手洗いに席を立ったときにお支払いをされていたときは焦った。

『あの、おいくらだったんでしょ？ 私、払います』

『いいよ。これは俺のお詫びなんだから、ね？』

なんにも違和感を残さない。私の年齢に合わせてくれてるその振る舞いは胸が沈むような感覚を私にもたらした。——でもすごいな、とも思う。他の人をここまで思いやれるのはそれだけこの人が優しいし。

優しくなければきっとできないだろうし、こんなことおもいつきもしないだろうに。

「あの、でも、本当にありがとうございました」

「ん？ なにが？」

車の中、やっぱりもう一度お礼を言っておこうと思い立ってそれを口にするのにこりととぼけられる。なんのことなの、という風を装っておいて実はきつと理解してくれていると思うから私はそれ以上そのことには触れないことにした。

「……ね、そんなに気になるならさ？」

「はい？」

「俺のこと名前で呼んでくれたらチャラっていうのはどう？ あと出来れば敬語もなしがいいな」

おっと、さっき上手くかわした感のあった話題を引っ張り出された———！

しかも私がお支払いのこと気にしてるの分かって言ってる、この人ってば。

「……柳さん、じゃだめですか？」

「じゃー、それでいいけど。あ、敬語は？」

ね？ と私に迫る目からは優しさと興味が溢れてる。比率は確実に後者の方が多いけれど。私が踏み切れずにいると、早く！ と急かす声もなんとなくその目から聞こえて来て。うう、もっとなんか、こう、ねえ？

「———っ、もっと、…優しくしてよ。———りゅう」

恥ずかしくて恥ずかしくて、語尾が思い切りしぼんだのが自分でも分かった。

私が言い終わった瞬間に彼は横目で私を見て、頭をひとつ、優しく撫ぜた。その私とは完全に違う手の印象になにか、とても痛くなる。

なんだろう。何が痛いんだろう。

いや、そんなことよりもこんなに大人なオトコノヒトを私が呼び捨てにするなんておこがましいし、ああ本当に失礼じゃないのかなあ？　　という問いを視線に込めて流すと彼はめざとくそれを見つけて。

「ありがとう、花実？」

その視線は私の問いに対して、否を明確に表していた。だって、彼の頬は揺るんでいるもの。

そう。柳、は本当によく笑う人だとおもう。

でもそれだけじゃなくてときに子供みたいにすねたり、くるりくると表情が変わる。だから一緒に居て退屈するってことがない。それだけたくさん表情っていう彼の側面を見せてもらえれば、絶対的な信頼が彼にできるのにそう時間はかからない。きっと彼もそれをよくわかってる。

「これからどうする？　　なにかしたいことは？」

ふと聞かれて分からなかった。なにという具体的な答えはないけれど、まだ帰りたいとは思わない。

「んー、柳、は？　　なにかしたいことないの？」

「俺？ そうだなー、たまにはのんびり映画でも……って定番か。——どう？」

「ん。それでいいとおもうよ」

それから終止無言。というか何を話していいか分からない私は会話をうまく続けられない。あーあ、どうしようかなと思ってなんとなく話題を探すために過去を振り返ってみたけれど、これと言って収穫はないかな。

あーあ。

こんなことになるなら合コンで会った男の子たちと一回くらいデートしとけば良かった。そうしておけばきっと、いま私が何をすべきなのかわかってたはずなのに。

ううん、でも絶対にそういう男の子たちとはデートなんてしたくない。

あの、舐め回すような目つき。煩いとしか感じない口調。友達付き合いで数回行ったただけだけど、あの空気にはきつとずっと慣れないまま。

“普通”、合コンに行ったら楽しいよ？

“普通”、合コンに行ったら男と話すもんだよ？

“普通”、合コンに行ったら愛想よくするもんだよ？

「——はあ、普通ってなに……？」

「普通？」

「あ、いやっ……」

思わず口から出ていた言葉をどうにかして取り繕おうという無意識から、無意味に言葉を重ねてしまったけれど。どうせこのまま取り繕っても気まずい空気が流れるのは必至だし、どうせ気まずくな

るならお話して気まづくなっても同じじゃない？

「あの、えっと。実は私……、男の人とデートとか、こうやって出かけるのは初めてで。その、あまり何をしていいのかわからないっていうか」

「……………初めて、ってデートが？」

至極不思議そうに聞き返す形で確認をとろうとする柳に一瞬頬が熱くなる。それと同時に言いようの無い多少のむっとする気分を抱えながら、それを上手く隠してこたえる。

「だって……。七歳から十五歳まで外国に居て、高校は日本の女子校で。彼氏なんていたことないもん。わかんないよ」

外国——主には西欧諸国——ではいくらハーフだとしても、私は“日本人”なわけで。それだけでちょっとした差別の対象。七歳から十一歳までいたオーストリア（奥太利）でも十二歳から十五歳までいたイギリスでも。

どこの人たちもそれなりに私へ興味を示してくれるし、仲良くなるうとしてくれる人が居なかった訳ではないけれどそれでも、友達というほど気が許せるようになるには日本にいるよりかは時間がかかった。

そう、女の子でさえ仲良くなるまでには時間がかかったし、男の子なんて遠巻きに指をさされることもあったらか苦手で苦手でしゅうがなかった。

そんな私だから、彼氏なんて存在するはずもなくて。

だからある意味アドルフみたいなの、なんの偏見も持たずに私に接してくれる男の子があっちに住んでいた頃に現れればよかったのに、

と思わないでも無い。

「だから今日は柳の好きなように進めてくれると助かるの。ね？」  
「……………そっか、初めて……………なんだ」

そう言った彼の顔は、また違う表情を私に見せてくれていた。

## 判別式D (3)

その後柳と私は都内一等地にたつ複合ショッピングモールへ言った。

シネマコンプレックスやブランドショップ、ホテル、もちろん多種多様な飲食店が入るそこは一日いてもきつと飽きない。

私たちはまっすぐ映画館へ行き、いまちようど話題になっている映画をみた。

戦争のその後が題材のそれは、政治的に宣言される“終戦”という言葉は決してすべての苦痛の終わりを表す言葉ではないことを私たちに伝えた。

——とある国。その国は内紛が終わったばかり。そこへ行き、現状を伝えようとカメラをまわすと大人たちは“俺たちは見せ物じゃない”と怒り部外者を排除しようとする。子供たちは無邪気に笑いながらカメラを物珍しそうに見て、“いま一番なにがしたい？”と問いかけられれば“勉強がしたい”とこたえた。

『いま一番なにがしたいの？』

『勉強だよ。だってそうすればお金をたくさん稼げる仕事に就けるでしょう？ お父さんとお母さんが楽をして暮らせるわ』

開けたばかりの未来に向ける、その視線の違い。

大人たちの絶望、子供たちの希望。

——争いが遺した爪痕は、もっと違う形でいまも人々を苦しめ続ける。



「花実？　大丈夫？　泣き止んだ？」

「うん。だいじょぶでデズ」

本当はまだ大丈夫じゃないけれど、そんなことを言ったら柳はいつまでも待ってくれる気がするから。

じゃあ、その店に入ろうか。と私を引っ張って柳はすぐにシネマを出た。

でも入ったお店、はともじゃないけれど気軽に入れるような雰囲気漂う店ではなかった。

その店にはいろいろか、なんていうからカフェかなにかだと思っていたのに柳が私を導いて入ったのはどうやらレストラン、しかも桁違いに高級な雰囲気漂う。

俯いていた私は「え、」と思わず顔を上げそうになったけれど、泣いてぐちゃぐちゃになった顔をあげてまわりの人に見せるのははばかられた。

けれど顔を上げなくてもわかったのは、まわりの――レストランの中にいる――人たちの空気が私たちがそこに入った瞬間にがらりと変わったことだった。

「――これは、ようこそおいでくださいました……」

誰だろう。店に入って数秒もせずに柳に近づいて来たのは若い男の人で、懇切丁寧に私たちに話しかけ、しかしそれを一瞬止めた。

そして、少し間があく。

一体どうしたんだろうと気になって控えめに見上げると、そこにはさっきの若い男の人ともうひとり壮年の男性が立っていた。いつのまに來たのだろう？

不思議そうに私を見ると、壮年の男性はにこりと笑って。なんだかひどくその笑みは私を安心させた。

「ようこそ、いらっしやいませ。私はこちらに勤めております、稲<sup>いな</sup>葉と申します。どうぞお見知りおきを」

「あ、えっと橘 花実といいます。よろしく願います……」

突然のご挨拶に思い切り反射で返してしまったけれど、言っている自分でもなにがよろしくなのかはわからない。というよりは、脳内は絶賛混乱中だ。

どうすべきか、と思って隣の柳を見上げると微笑んでいたからとりあえずは対応として、間違いではなかったみたい。

——ではご案内いたします。

その言葉を発した稲葉さんについて行くと通されたのは高級フレンチの個室と思われるような席だった。そこはもう完全に部屋、と言って差し支えなくたぶん十畳か、もっと広いか。

窓際に食事用のテーブルがあり、座ると夜景を見ながら食事をできるようになっていいる。残りのスペースにはソファや椅子が品よくおいてあり、実用性とインテリアの両方をかねているようだった。

そのソファに柳が座り、促されて私は隣に腰を下ろす。窓越しに見える夜景は、まだすこし見るには早いようだ。

「あの、どうしてこんなところ連れて來たの？　ここすごく高そう

だし……」

私のお財布の中身じゃ料金の半分だって払えないよ、きっと。

——そんな私の脳内計算を見破ったように柳はけたけたと思う存分笑ったあとに、私の頭を優しく撫でた。

「……っ、いいね花実。すごく良いと思うよ。——まさか今日一日ずっと一緒にいて気づかないなんて、ね」

「柳笑いすぎ!」

ね、と言ったあとに柳はまた思い出したように笑うからこっちの方がはずかしくなる。

「ごめんごめん。まあ花実の、お財布事情はよくわかったよ。心配はご無用です」

「え、なんでご無用っ——ちょっとなんでそんなことわかるの!?!」

「さっきの口に出してたよ?」

あー、またやっちゃったあ。

あんなの口に出してたなんて恥ずかしい……

「ああ、また話がそれた。——でね、花実の心配はまったく無用なわけ。……どうしてだとおもう?」

「——? わかんないよ」

ひとしきり考えたあとに、むすりとした顔でこたえたと柳はそれを期待していたのか、それともわかりきっていたのか。「花実はやっぱりそうでなくちゃね」と私にはわけのわからないことを呟いていた。

「じゃあ答えを花実にあげよう」  
「うん」

私にはよくわからない柳の言葉遊びは難易度が高すぎて、理解できない。

でも答えをくれるというなら、私も少しは理解できるかもしれない。

にこり、と笑う柳。

その微笑みに私は今日、はじめて“なにか含まれたもの”を感じた。具体的になに、とはとても言い表せることはできないけれど。なんとなく直感的にそれがあんまり良くないだろう、ということも私には分かった。

「このビルは俺のものだから」

「……いまなんて？」

「いま俺たちがいる、このビル全部は俺のものだから。いや、正確には俺の一族のもの、かな？」

そして“なにか含まれたもの”は最悪な状況の中、正体を表した。冷たい、あざけり、侮蔑。

でも、それは決して私に向けられたものではなかったけれど。

「戦後のGHQによる財閥解体は知ってる？ あの混乱の中、表立って解体された財閥は歴史上とても有名だけれど、実際戦前——いやもっと前の時代から日本の財界を牛耳っていたのはそういう人たちではない。報道には出ないし、歴史にも滅多に出てこないけれど、事実上日本を太古の昔から掌握しているのは俺の一族——五鹿央家

なんだ。しかも本家に近い血筋の有能な者たちばかりで」

どうしよう、意味が、わからない。

「歴史にも、報道にも出ないって……どうして——」

「そうだな、たとえば五鹿央家に不利益な情報を流したり、汚点になるような歴史を書物にある人が遺したとして。それは直接、その人が日本、いやこの世界で生きて行くのに不自由になることを意味するからね。日本、いや世界中にいたいだけ五鹿央が関わっている企業があると思う？ 考えただけでも恐ろしいことだよ」

開いた口が塞がらない、とはまさにこのこと。

昔の人はよく言ったものだ。

頭の中がよくわからないことでぐるぐるして、整理をしようと思ってもぐずぐずになったそれは順序も意味もあったもんじゃない。

「で、なんでこんなことを花実にしたのかってことだ。——理由なんかいくらでもあるよ。何個だってもっともらしいものを後からとってつけられる。でも引き金になったのは、その一番の理由は」

——花実が“衣幡 柳”を褒めたから、だよ。

頭の中が真っ白になった。

意味がよくわからない。どうしてそんなことが理由になりえるのか、と思ったけどもしかしたら私は分かっていたのかもしれない。全部を。

予感が余波としてカラダに訴えていたのかもしれないから。

だから私の脳はインプットを拒否して、アウトプットだけをし続けていたのかもしれない。

「俺の母君の旧姓は“衣幡”なんだ。それからミナモの創業家の桜庭と衣幡は親戚。だからもう四年前、ミナモを立て直せないと悟った桜庭氏は俺の元に泣きついて来た。どうにかならないものか、って。もちろん、どうにかすることは簡単だった。裏から五鹿央の力を持ってすればね。でも五鹿央の家名は表に出すことはできないから仕方なしに俺は母君の旧姓を借りて」

——まああのバーで初めて会った日には驚いたよ。ほとんどいきなり「衣幡 柳のことを尊敬しているんです」っていきなり女の子が熱弁しだすんだから。

最初はお金目当てかな、とも思ったんだけどどうも違うみたいだし。話してるうちにかわいいな、って思うようになって。今日だって一日中一緒に居たのに全然気づかないし、ね。

「ね、かわいいよ。花実」

「——っ、か、か、か」

「うん？ か？」

“か”がどうしたの？ と聞かれてはやく言葉にしくちやと体だけが急いだ。心はやけに冷静で私が何をしなくちゃいけないのかを、明確に理解して体に行きさせようとしていたから。

どうしよう、どうすればいいの。

ちがう、こう、しなければならぬから。

そのためにはどうすればいいの。

それでも言いたいフレーズ最初の一字しか言い出せなくて、無意味な苛々が襲ってくる。

はやく、動け。

はやく、働け。

はやくはやく。

だから一旦深呼吸をして落ち着くことにした。

……。ふう。

どうにか震える指先にまで神経を行き渡らせて。

「……………帰ります」

自分でも驚くくらい冷たい声が出た。

気分が真っ暗な闇の底に沈んでいるように冷たく、寒い。溶けることを知らない氷みたいのに、とても痛いくらいに。

バッグを持って立ち上がる。

通された部屋から出るその瞬間、なんだか泣いてわめきたい気分になった。

## 背理法 A (1)

\*\*\*

嘘は嫌い。

偽りの姿は見ているだけで苦しく、虚しくなってくるから。

傲慢さは嫌い。

それを感じるだけで皮膚から心に、ちくりちくりと痛みが伝わるから。

でも、暗闇はもっと、もっと嫌い。

『帰って来ちゃったのはまずかった、かなあ』

はあ、とため息をついて思い返しはするけれど、今更すぎたことを悔やんだとしても取り返しはつかないのだから、もうあきらめよう。

あの時、私が帰ろうとすると稲葉さんが慌てた様子で私に近づき、困ったような顔で「またお待ちしております」と言った。

どうしたんだろうか、という訝しむような雰囲気と困ったように笑う稲葉さんに私はすこし罪悪感を感じた。

——本当はこのまま帰っちゃいけないんじゃないか、そういう考えも頭をよぎったけれど。そんなこと知るかと怒りに任せてそのま



まエントランスを出た。稲葉さんには悪いけれど。

そうして出ていき、電車を乗り継ぎ、自宅の最寄り駅から歩いて帰る途中に気がついた。

『私、とんでもないことしたのかも』

だって柳——五鹿央さんの言葉を借りて言うなら『五鹿央家に不利益な情報を流したり、汚点になるような歴史を書物にある人が遺したら、この世界で生きて行くのに不自由になる』らしいから。

私がとった態度が彼の不利益になるとは思わないけれど、少なくとも機嫌を損ねることにはなったかもしれない。

でもいくら気分を悪くさせられたからって、小さな子供じゃあるまいしすぐに実力行使にでるとはおもわないけれど。でも、逆にすぐ行動を彼が起こさないと余計な勘ぐりが働いてしまう。

——もしかして、だんだん外堀を埋められてる？　って。

どっちに転んでも、私に不利にはなってるな。

大なり、小なりの危険が迫って来ていることは確か。なのに私は抵抗するすべを何一つもたないわけで。

つまり、——戦場でライフルを持った相手に丸腰どころか素っ裸で向かって行くようなもの。これを愚か者と言わずになんと言おうか。

そんな呑気なことを考えつつ、一ヶ月近い時間が何事もなく（・・・）過ぎ去ろうとしていた。

「花実さ、最近例の挙動不審がおさまってきたよね」

「うん。なんか、うん。うん」

「やっぱ前言撤回かも」

八重はそんな風にいうけれどこの一ヶ月の間で私の“身の回りの危険警戒レベル”はだいぶ下がった。

最初の頃はバイトすらなにかの手回しで辞めさせられるんじゃないかとか、もう疑い出したら霧が無くて。疑心暗鬼もいいところだった。

でも、バイト先の店長さんはいつまでたっても至って普通のいい人だし、大学でもとくに変わった事も無いし、だれかに狙われてるような気配はない……と思う。

そんなわけで八重曰く、私の挙動不審は少しずつ減少傾向にある。

「それにしても一ヶ月前は『八重、私がいなくなっても悲しまないでね』なんていきなり真面目に言い出すから、どんなアブナイ妄想してるのかって心配になったわ」

「……そこは掘り返さないで。埋めといて。そっとしておいて」

「それに？ 事情を聞こうにも『きっと八重に話したら、八重まで危ない目にあうよ、話せないっ』なんて真顔でいうから、友達やめようかとおもった」

「うう……、ごめんなさーい」

たしかに一ヶ月経って、当時の私を客観的に見た状態を述べられると恥ずかしくて死んじゃいそうになる。無駄な勘ぐりとある種の恐怖と、あとはすべての事柄がマイナスに働いていた事も要因のひ

とつ。

でもこの一ヶ月、なにもなかったし。

きわめて以前と変わらない日常を送ってたし。

さすがにもう、大丈夫だよな？

「あのね？ 八重。私に迫ってたかもしれない危険はね——」

《危険って、なにがあったんだい？ 花実？》

聞こえる流暢なドイツ語。肩に軽くおかれた手からは逃がさないという意思が漏れて私に伝わってきている。その原因を脳内で計算し、答えを導き出すと、当てはまるものはひとつしかなかった。

背中がひんやりと冷たくなるのが手に取るようにわかった。

《な、なんでここに、いるんです？ 私を……私をどうする気なんですか、》

《——どうする、ってどうしてほしいの？ お望みなら日本から追い出す事もできるけど、そうしてほしい？》

《そうしてほしいように見えますか？》

これは一種の賭けだった。

これでもし、この人が私を日本から追い出すなら、あの時この人が私に見せたアノ感情の一片を否定しない事になる。

それでもそんな事はこの人にとっては些末な事で、私なんてその他大勢の虫けら以下の存在。

でも、虫けらには虫けらなりに頑張ることがあって、生きる価値

があるってことを認めてもらえるように。

もし、もし、少しでも認めてくれる気があるなら……――

《冗談だ、花実。日本から追放なんてしないよ。約束しよう。――  
そのかわり》

《かわり？》

ひと呼吸おいて五鹿央さんがにやり、いやくすりと妖艶に笑った気がした。いや、笑ったのだ。

地に足をつけている気がしない。蛇に睨まれた蛙状態の私。

出来るなら一寸前の私に戻って聞き返したのを取り消したい。だって、聞き返したら、答えを是が非でも聞かなくちゃならない。

「じゃあ花実。一緒に来てくれるね？」

「いつかお……」

五鹿央さん、それはできません。と言おうとしたら突然唇に人差し指を当てられた。

《ここでその名前を出す事が、君の不利益になるとは思わないのか？》

「……っ」

――その五鹿央の名前にいま、まさに脅かされているのに？  
そんな風に嘲笑<sup>わら</sup>われて、脅されているような気がするのとは果たして被害妄想なんだろうか。

「花実のお友達ですか？ 少し彼女をお借りしますね」

「はい、そうですね！ どーぞ、少しと言わずにたくさん。いえいえ、お持ち帰っちゃってください！」

「じゃあオコトバに甘えて」

ふふ、と今では何の感慨もない五鹿央さんの微笑みに八重は良い男仕様の笑顔で応対している。声のトーンもいつもより高い。

持ち帰っちゃってください、って私は道具じゃないのよ。私はあなたの媚をうるための献上品じゃないのよ。

反論をお腹の虫に食べてもらって、「じゃあね」と八重に残りを吐き出した。

「……ちゃんと、飲み込む事も剥き出しにすることも、できるんだ」  
「……、私だって」

それくらいできます、と言いきったけれどそれじゃあ意味がない、と踏みとどまった。

でも、結局笑われるのだから変わらないか、と諦めたのはそれから数秒後。

## 背理法 A (2)

「花実、君はなにか勘違いをしている」

「……私が認識しているのは『五鹿央さんが私を気に入らない』ってことです」

連れてこられたのは私の通う大学の学長室だった。しかも近くまで歩いて行くと、学長が腰を低くしてやってきて。

『や、衣幡様、今日はどうしてこちらに？ ご連絡くだされば……』

と、どこからともなくごますりにやって来た学長は警備から彼が来た事を知らされたようだった。学長が目の前にいる人が五鹿央という得体の知れない権力者だということを知っているのかどうかはわからないけれど、そうでなくてもこの人はミナモという世界的企業の経営者なのだ。ごまをすっておいて損はない。

彼が話が出来る場所を探していると一言いうと、どうぞ学長室をお使いくださいと場所を提供してくれた。

そして立ち去る間際、私の学年と学部、名前をきっちり聞いていった。あとでなにに利用されるんだか。

「だから、それが勘違いだと言っているんだ！」

「なにがですか！」

私はもう我慢の限界に来ていたのかもしれない。学長室に入り、すったもんだを始めようとしていた彼に。ついに

壁を越えてしまった。ああ、さっきあんなに見栄を張ったばかりなのに。

「なんなんですか！ 私のことが気に入らないなら相応の態度をとったらいじやないですか！ 嫌いな煮るなり焼くなり、好きな無理矢理結婚でもさせればいい！ もう、その回りくどい言い方言い回し、態度に雰囲気！ もうたくさん！ どっちかにしてください！」

「——あ、そう。わかった」

そうして見覚えのある心底で何を考えているのかわからない笑顔を私に向けた。

いやないやな、風とでも言おうか。ぞくり、と。

そして私は自分が言った事を、たっぷり時間をかけていまさらよく考えることにした。

よし、うん。言いたい事は全部、そう全部言った。まだ言いたい事は溢れてくるけれどまあいいだろう、付け足そうとはおもわない。いや、付け足す事はもう、叶わない。

「じゃあどっちかにするよ」

「はい」

「いいな？」

「いいです」

「前言撤回すんなよ？」

「しません」

「じゃあ」

勿体振ったこの人になにか違和感を感じるべきだったのかもしれない。

その前からの予感、余波。あつた、じゃない。

「Will you marry me？」

——卑怯だ、と思った。

だって私にはこう答えるしか道が残されていなかったから。

「……Yes。」

その道は。

その道に踏み入れた足は。

まるでガラスでも踏んだように痛くて。

その道に散らばり広がるガラスが一体どんな形を作っているのかは、いまの私の頭では考え浮かびもしなかった。



鵒鳥の(1) (前書き)

ぬえどり  
鵒鳥の。

## 鵜鳥の(1)

そこ故に、為むすべ知れや  
音のみも、名のみも、  
絶えず天地のいや遠長く

偲ひ行かむ、御名に懸かせる  
そが言葉、万代までに

はしきやし、我が妹の、形見かここを

「……結婚、て」

「花実が言っただろう、『好きなら無理矢理結婚でもさせればいい』って。だから」

それは言葉のあやだということがわからないのか、とため息を吐いた。

私は“好きなら”って言ったのに、なんで嫌いな私のことをそういうことにしちゃうわけかなあ。

まあ結婚ていうのも一つの手段としては有効かもしれない。  
結婚してしまえばそばに問答無用で置けるし、監視の手間が省け

る。

きっと彼はそんな風に考えたんだろう。そんな風にしか結婚を考えられないなんて、不幸な人だなとんだか可哀想になってきた。

「私、……老けてみられるけどまだ学生なの」

前に言われたことを言ってみた。どんな反応をするのかと唐突に知りたくなったから。この前は、どうだったかしら。

「いや、……あれは俺が悪かった。すまない。——結婚って言うてもすぐにじゃない。もちろん花実が卒業をしてからだし、それ相応の準備をしないと婚約すら出来ない」

にや、と彼が笑った気がした。

「立ち居振る舞い、お茶お花、それからエステかな。君にはすべてやってもらうよ。一週間首をひねる間もなく過ぎて行くくらい忙しい。まあ幸いなのは、語学がそこに追加されないことだな」

——我家は三カ国語以上は話せないといけない決まりだからね、と不適に笑う五鹿央さんはやっぱりよくわからない人のような気がした。

「お茶お花も習ってました。所作も身に付いています。語学は言うことないのでしょう？ 私、やることないんじゃないですか？」

私は小さな頃、問答無用でお茶、お花、ピアノ、お習字、合気道、ついでに厳しいお祖母様に所作まで習ってた。

いままで役に立つ場面なんかないとおもってたけれど、なんだか役立つ場面に巡り会えた気がする。

「……本当に？」

「本・当・に！」

疑うような声音とまなざしだから、なんだかいらついで。

でもよくよく考えれば信じられないのも仕方ないとおもう。五鹿央さんから見てこんな庶民じみた女が、お茶とかをやってたなんて信じがたいのかも。

——でも、真実は真実だもの。ふん。

「ふーん」

興味なさげで気の抜けた声をきいてまた苛立ちが押し寄せてきそうだったのを、なんとか諫めて。

じゃあ帰っていいよ、という五鹿央さんの尊大な物言いに、私は勢いよく学長室を飛び出したのだった。

## 鵜鳥の(1) (後書き)

冒頭の古文は、万葉集(2—196)より、引用・改変しております。

## 鵜鳥の(2)

\*\*\*

いつ惹かれたんだと問いつめられると困る。いつ、なんて特定はできない。もしかしたら最初からかもしれない。

でもただ、最初は祥哉の話をおもしろいなおもっただけだった。

『すごい美人なんだけどもすっぴんで、酔っ払うとミナモの社長の手腕の高さをすごい勢いで話し出す、酒好きの女性客がいる』

そんなことを聞いただけだった。

最初は何とも思ってたなかった。

——どうせすっぴんなのは自分が美人で化粧する必要も無いとか思っているだけで、酔っ払ってそんなことを話すのは、経済の話を祥哉にして“頭が良い”と思わせる、祥哉狙いの女。

それくらいのことだろうとおもっていた。でもそれを祥哉に話したら笑って全否定されて。それで気になってあの日、祥哉のバーに行った。

そしてやって来た女は、祥哉の話とは違っていた。  
ピンク色の丈の長いスカート。そしてばっちりのフルメイク。

話が違うじゃないか、と祥哉に目で訴えると奴は慌てて「今日は雰囲気違いますね」と話しかけていた。

『ああ、友達の付き合いで無理矢理合コンに行かされたんです。最初はよれよれのTシャツとジーパンだったんですけど上手く丸められちゃって』

『なるほど、』

言葉を放ったまま俺の方に視線を投げてくる祥哉は、勝ち誇った顔をしていた。……だからなんだって言うんだよ。

最初にマティーニを注文したのに「アースクウェイクが飲みたい」と無理を言う。その瞳には確かに祥哉を狙っている光の類いは灯ってはいなかった。

そのうちに祥哉がさりげなくこちらへ流れてくる。

『な？ 楊貴妃もびっくりの美人だろ？ なのに気取ってないし、気さくだし。いい子だぜ？』

『……………ドリームを』

『は？ お前が？ なに言ってるんだよ。お前にとったらドリームなんて酒じゃなくてジュースだろ』

あきれたようにものを言う祥哉の、口調すら気にならなかった。

『違う、——彼女に、だ』

そこまで言うとは祥哉は意味を理解したのか、にやと笑いながら「かしこまりました」と言って、彼女の前に戻った。

かしこまってカクテルを作ってるつもりだろうけど俺には、笑い出したいのを堪えながらだっではつきりわかる。

そんな祥哉にさえ気づいていない彼女は天然か？　と疑いたくなる。

店の中にはカウンターにひとり座る美人を虎視眈々と狙う野郎どもが数えるのも面倒なほど。酒ではなく彼女を目当てに通っている野郎もおそらくはいるだろう。

『ドリームです』

祥哉の声が聞こえた。

『へ？　私、頼んでない……』

『あちらの方が』

あちらと言われれば振り向きたくなるのが心理というものだろう。こちらを真っすぐに射抜く視線を俺に突き刺した彼女に、俺はこりと出来るだけ作った穏やかさを見せた。

『え、あの』

『俺が好きでしたから、気にしないで』

若干挙動不審な彼女を丸ごと包むように微笑む。

そしてさりげなく空席だった間を詰めて、話しかけるとときよろき



よろと落ち着かない仕草を彼女は見せる。

アースクウェイクは頼まない方がいい、と言えきよとんときも当然のように聞き返してくる。――なぜ、と。

祥哉の言っていた『その子が来るといつもの数倍は疲れる』の意味が分かった。牽制するための労力がいつもよりはるかにかかる、ということかと。

そんなにアースクウェイクが飲みたいのか、とその事ばかり考えていたら強い酒が飲みたくなった。のどが熱くてやけそうなくらい強い酒。一気には煽れないくらい、強い酒。

『……アースクウェイク』

『かしこまりました』

それから名前の話をして。普段なら聞かないような話まで聞いてしまった。

そう、多分珍しかったからだ。花実なんてそんなにある名前じゃないし。

ヤナギと書いてリュウ。

しな垂れかかる柳のように柔軟さのある人になれるように、強い人になれるように。

実は柔軟性のある――例えば柳のような――ものは、がちがちに固めたものよりも強かったりする。

『私の憧れてる人と同じ字です』

だから、同じ字だと言われて興味をもったのに。

『五鹿央さんご存知かと思いますが、ミナモの社長さんの衣幘 柳さんです。彼が社長に就任した時は世間みたいに私も不信感を覚えた事がありましたけれど、すぐに会社を建て直したあの方は本当にすごいなあ、と思っっているんです』

興味を持ったのに、それが自分だったのだから興醒めだ。

しかも会社を立て直したから尊敬してる？ ……なんだ結局、金か。

だから遠回しに「その社長に憧れてるんじゃないくて、“社長の儲ける金”が憧れの対象で、君の好きなものなんだろう？」と聞いた。

祥哉はあからさまに嫌な顔を俺に向けて、顔をしかめたけれど。

———期待は「そうです、あんなにお金を稼げるなんてすごいですね」そんなところだ。金なんて、……無ければ無いでこまるし、ありすぎればありすぎるで災いしかもってこない。

しかもそのどちらでもない“ちょうどいい状態”に居る時は、もつともつと金を貯めることしか頭になくなってしまふのだから。全くタチが悪い。

君も、そう、なんだろう？

『いいえ、』

真っ暗な闇の中にいた俺に向けて放たれた、真っ白の光だった。

それだけじゃ、それだけじゃ。

だめだったんだろうか。

それだけじゃ惹かれて、好きになって、独り占めしたいと思う原因にはなり得ないのだろうか。

はじめてそんな風に感じて、胸が痛くて。本当にはじめてで。

はやく手に入れたかったけれど、けれど。俺のいる闇に引きずり込むには気が引けて。逃げ道をいくつも用意したけれど、彼女はすべてを無視して俺の心を放さなかった。

もう無理だ。

だから、だから。

何を利用したっていい。どんなことでも利用する。

半分しかない俺の心を放さない光。やっと見つけた光だから、消さないように慈しんで。拒絶されても、もう無理だ。

必ず手に入れてみせる。たとえ君を鳥籠に囲う事になろうとも。

### 鵜鳥の(3)

\*\*\*

なんなの！

なんで私が結婚なんて。

でも断れないんだもの。断ってもしお母さんとかお父さんとかになにか危害が加えられるかもしれないって考えたら絶対に断る事は出来なかった。

なのに、あの男。なに考えてるの。

「……ただいま、」

誰もいない部屋に向かってただいまと言って、ベッドに倒れる。  
明日、お母さんのところに行ってみようかな。心配だし、なににより相談しなくちゃならないし――

ピンポーン。

唐突に耳に無機質な音が届いた。

誰かが来たみたいだなあと立ち上がって、モニターを覗き込むとそこにはスーツを着た男の人が立っていた。

……訪問販売？

眼鏡がやたらと過剰に真面目な印象をこちらに与えるその日とは、眼鏡が無ければただの若くて所謂“カッコイイ”青年だ。

訪問販売なんてごめんだから追い返そうとボタンを押して答えた。

「はい、どちらさまでしょう」

『あの私、三鷹みたかと申します。えー、インペリアルグループの』

「あの訪問販売とかでしたら結構ですの」

『あ、や、違います！ 柳様のご命令で迎えにありがとうございましたので出て来ていただけると助かります』

はい？

リュウサマって私の変換機能にミスがなければ“柳様”になるのだけれど、どうなのかしら？ というより私の知り合いにリュウという名前で堂々と尊称をつけられるような方はアイツしかいない。

そしてその三鷹さんに受け答えをしようとした瞬間、私の携帯電話が着信を報せた。なんとなく予感がして、三鷹さんに少し待ってもらおうように告げてからその電話をとった。

「はい」

『花実？ 使いを花実のところにやったから指示に従って。何も持たなくていいから、三鷹にとりあえずついて行って。じゃ』

言いたい事だけをずらずら並べたあとにぶちりと電話を切ったばかりきつた電話の相手に頭痛を覚えた。今の彼——五鹿央さんを漢字三文字で表すとしたら、私は間違いなく”理不尽“の文字をあげるだろう。

理不尽、理不尽。

きつと百回、面と向かって言ったって足りないに違いない。

「三鷹さん、わかりました。いま、行きます」

そして私の迎えを命じられたこの三鷹さんという方もかわいそうだな、と知れず同情し、私の愉快なお出かけが始まった。

「花実様、何もお聞きでなかったようで。申し訳ありませんでした。配慮が行き届かず……」

「あ、や、ちよっ！ 待った！ いや待ってください！」  
「はい？」

下におりてさっきまでモニター越しで話していた三鷹さんと合流すると、彼は大変に礼儀正しく私に接しようとした。

無理です、そんな扱い無理です！ ジンマシンが出てきそうにぞわぞわするので無理です。

「三鷹さん、様はだめ。過度な敬語も、だめ。気の使い過ぎも、だめ。この返事はYESのみ、可」

「はあ、しかし私の仕事は柳様の……」

「じゃあ柳様だけにそういう態度でいればオールオッケーでしょ？」

はつきり言って彼のこういう態度に不快感は感じない。

でも普段こんな風に扱われてない私にはレベルが高いというか、こんなに堅苦しくいられるのは無理だ。

それでも妥協点を探ろうとしている三鷹さんの眼鏡の奥にある瞳が私をじっと見ているのを感じる。

「——わかりました。そのようにします。ただし最低限の、人と

しての礼儀は要しますよ、花実さん」

「わ、よかったあ！」

俯いた顔を上げるとまともに三鷹さんと目が合った。

——と、気づいた事は彼の瞳の色がもの凄く薄いグレーだということ。

それに気づくと他にも色々気づく。車に乗ってください、といわれ助手席に乗り込んでからも三鷹さんを観察する。

肌もなんだか少し白いような。

なんだか体つきもがっしりしているような。

そう思ったら確かめなくちゃ、とハンドルを握る手をするりと撫でた。そして手を重ねてみた。

「どうかしました？ 少し、くすぐったいんですけど」

「うーん、日本人じゃないです、よね？」

「あ、感がいいですね。私にはデンマークの血が入ってます。名前も三鷹 カイルですし。今日はここにくる前に花実さんに怪しまれないため、スプレーで染めましたけど、髪も本当はライトブラウンです」

にこり、と笑うと優しげで。

これが五鹿央さんの部下じゃなければ最高なのになあ、とひとり心の中でこちた。

「うーん、指綺麗ですよ。やっぱり肌が白いから？ これはポイント高いですね」

「あーあー、花実さん、もう目的地につくので遊びはあとに。用事が終わってからいくらでも観察していいですから」

いいですから、と言いながらウインカーを出して三鷹さんは路肩に車を止めた。そして先回りして私のために助手席のドアをあけてくれた。……気の使い過ぎはNGって言ったのになあ。よし、あとで言っておこう。——と思いつながらもとりあえず悪い気はしないので、ありがとうございますと笑顔とともにお礼を言った。

「ようこそお越し下さいました。衣幡様から伺っております。こちらの方でよろしいですか？」

「そうです。じゃ、よろしくお願いします」

なにか、あるのか？

ようこそ、と出て来た女性は日本人には着こなしの難しい海外ブランドスーツを文句無く着こなしていて、スタイルは言うまでもなく抜群。

わー、美女だ！ と平時であればよこんで観察はしてるくらいには彼女は美しかった。

「衣幡様より伺っております。橘 花実様でございますね？ わたくし、石谷ともうします。橘様のお世話をさせていただきます」

なんのお世話だ、と頭に疑問が浮かんだ瞬間にそれは強硬手段によつて排除される。あれよあれよ、と言う間にいわゆる高級エステサロンの中へ手を引かれて。

されるがまま、流れに身を任せて“もうどうでもいいや”のスタンスでいると、それにあわせてまわりがてきぱきと動いてくれた。

施術されてる最中は気持ちがよくて途中途中（というか大半）の記憶がないけれど、終わった後はすごく清々しくて、気持ちがよかった。出し切った、って感じ。



「橘様、こちらを見立てさせていただきました。手をお貸ししますのどうぞお召しください」

「お召しって……着るってこと？　これを？」

思わずなにもかもわすれて聞き返してしまうくらい、用意されたドレスは衝撃的だった。というよりは日本人向けには作られていないな、という印象の方が強かったかもしれない。

片羽大胆にひらけて、胸の谷間ぎりぎりまでを露出する。生地は肌に張り付くような、身体のラインを存分に出す、けれど上品な紅色のマーメイドラインドレス。

純白のファーストールを身体に巻き付けて。足元は歩けないほど高いヒールのパンプス。もちろんドレスと同じ紅色。

すべてを身につけて気づいたのは、大きなスリットが右サイドの際どいラインまで入っているという事。そのスリットが入ることで、このドレスは着る人をすごく選ばざるを得ない。

——こんなハダカに近い格好の服ってあり？

そして最後に石谷さんは私に勝ち気に見えるフルメイクと、髪をパーティ仕様のハーフアップにまとめてくれた。

「お首元が寂しく感じられますが、心配ございませんよ。衣幡様をご用意していると伺っております」

「あ、そうですか」

べつに首元が寂しいなんて、微塵も思っていないけど。

ああ、それよりか足がスースーして落ち着かない。……五鹿央さ

んてばなに考えてるわけ？ 私を人形みたいに飾り付けて何がしたいの。

それに三鷹さんは三鷹さんでどこかに行っちゃうし、うう、心細い。

石谷さんは石谷さんで、すごく、そのですね、慇懃いんぎんびろうというか。過ぎるというか。

つまるところ、慇懃尾籠いんぎんびろうというか……。

「橘様」

「あっ、はい！」

いきなり名前を呼ばれて、彼女に対して嫌な事を考えていたからすこし驚いて大きく返事をしてしまった。

しかし継がれた彼女の次の語調は、これまでに無いほど優しくかった。

「不安、ですか？」

「え？」

「それとも、不満ですか？」

「は？」

けれどもそれは私の思い違いだったようだ。

優しくなった、のではない。ただ単に彼女の策だっただけのようだ。

「なにが不満なのです？ そのようにお美しい容姿をお持ちになって、衣幡様に見初められ、これから先何不自由無い未来が約束されたも同然というのに」

「や、ちよっと待ってください。美しいって、私が？ ちよっとそ

れはなにかの間違いでしょう、あなたの方がよっぽど……」

それを私が言ったあとに石谷さんは信じられない、という目を私に向けて怒りをあらわにした。けれどそのあとに私を観察して、なにかを考えているようだった。

そのすごい迫力に負けて私は怯んで、次の言葉を紡ぐ事が出来なかった。

「……橘様。あなたは、美しいのですよ。私が嫉妬するくらいには。気づいておられないようですけれど。女性に一寸も興味がありません。なかった衣幡様が惹かれるくらいに、です。だから橘様、あなたはもっと気高くなければならないのです。卑屈になることも、自分を卑下することも、——決してあってはならないのです」

卑屈になっては、いけない？

自分を卑下してはいけない？

どういうこと、なのかなあ。

「石谷さん……」

「ああ、三鷹が来ましたよ。さ、このコートを着てください。衣幡様を驚かせて差し上げてくださいませ」

鏡で見た私は私じゃないみたいだし、作り出されたこの姿なんて所詮は本物の私ではない。自分の姿形に自信なんて、これっぽっちもない。

だけど、石谷さんに『嫉妬するくらいに』って言われてなんだかほんのすこし嬉しかった。自分に、そう、自信がすこし自信がもてたように感じるができる。

「石谷、終わったか」

「ええ。美しいでしょう」

三鷹さんがそれと同時に私を見つける。なんだかこっちははずかしくなる。彼は彼で「すげー」と隠しもしないで言うから、本当どうしたらいいのかわからなくなってしまふ。

「石谷さん、」

「橘様、どうか私のことは石谷とお呼びください。いずれきつとあなたはそう言う世界に飛び込まねばならないのですから」

にこり、と上品に笑った彼女はさっきまでの印象とは随分違ったと感じる。さっきまでは得体のしれない黒いなにかを持っていた彼女だけれど、いまは爽やかな、色ならそう、ブルーに変わっていた。

「……石谷、ありがとう」

そう言う世界に飛び込む、つもりはない。

けれど彼女が変わったなら私も変わらなくちゃ、と。そこが何をしたら良いのか、何を求められる世界なのかはまだわからないけれど、せめて彼女が望んで導いてくれたような振る舞いは出来るように、と。

そして三鷹さんに腕をひかれて車に乗り込み、だいぶ経ってから。

「あ、髪の色がちがう！　ライトブラウンだ。瞳の色と似合ってる。

とても神秘的……」

「ありがとうございます。花実さんを石谷に預けた後に髪の色を落として来たんです。……でも花実さんのが綺麗ですよ。あ、いまのは柳様には内緒で」

「あはは、了解です」

ふざけながら片目でウィンクをして三鷹さんに返事を返すと、彼はそれからまたグレーの瞳を細めてふんわり笑っていた。

けれど次の瞬間真面目な顔つきになった彼は私に情報をもたらす。――行き先はある有名ホテル。今日はどこかの会社のパーティで、五鹿央さんもそのパーティの主催者と出席者の一部を無下には出来ないため仕方なく出席するので、同伴を私にということだったらしい。

それならそうと前もって言うてくれれば少しは心の余裕が持てたのに、とぶつくさ言っていると「前もって言うておいたら逃げただろう」と五鹿央さんが言っていたと教えられた。

はい。たぶんその通りです。

「はい、到着しました。ほらあそこ、柳様が待ってます。大嫌いなパーティで人を、しかも外で待つなんてあり得ないんですよ。花実さんだから、です」

「……そんな、」

「だからありがとうございます、と一言だけでもこんな風に笑って言うてあげてくださいね」

こんな風に、と自分の顔を指すものだからおかしくなって、おもいきり笑ってしまった。そしてちょうど笑い終わった頃に車が五鹿央さんの前でぴたりと停車して、三鷹さんはまた私のために先回りでドアをあけてくれた。

「花実、……綺麗だ」

開口一番に五鹿央さんはそんなことを言う。

普段だったら——というか今も——そんなこと面と向かっていわれたら恥ずかしくて死んでしまいそうになるけれど、でもまず今はとりあえず実践してみよう。三鷹さんの言っていたこと。

「寒い中待っててくれたんですか、……ありがとうございます」

三鷹さんの言った通り——にっこり笑ってありがとう。

今日この場に呼び出されたことは、本当に不本意で仕方ないけれど。

「ああ、どうしよう花実。いますぐ持って帰ってキスしたい。誰にも見せたくない」

「……——ふざけるなら帰ります」

そういうとすぐに「嫌だな、冗談だよ」といけしゃあしゃあと何食わぬ顔で答えてみせる。

「そうだ、石谷に首元が寂しいといわれただろう。この、宝石をつけようと思ってね」

思い出したようにそう五鹿央さんが言ったから、私も石谷にそんなこといわれたっけなあと思い出した。そしてごそり、と天鷲絨生地地の箱から取り出されたソレをみて、私は腰が抜けそうになった。

——値段を考えることを放棄したくなるような、ダイヤの首飾り。

この紅色のドレスには大抵の華奢なネックレスは負けてしまうだろうと密に思っていた私の心配を無用にする、そんな首飾り。

トップにあしらわれた大粒のダイヤ、そして複雑な模様を描きつつそれは一つの輪になる。

「古いけど良いものだ。きっと似合うよ」

「あ、ありがとう」

寒いからとホテルのロビーに入り、五鹿央さんは私の首にそのネックレスをつける。ドレスを着た人たち——きっと私たちが今から行くパーティーの招待客——が私と五鹿央さんをじろじろみて足早に去って行く。

きっと私たちはほぼロビーの真ん中にいるから、「こんな所で」  
とか思われてるんだろうなあと思いつつ、誰かにネックレスをつけられるという恥ずかしさを頭の隅っこに追いやる。

ああ、でも恥ずかしい。

「よし、これでいい。素敵だ」

「……あんまり褒めないでください」

「どうして、なぜ？」

「——はずかしいから！」

語尾が消えかかりそうになるのを防ぐために勢いをつけて息を吐いた。

ふーんと、私をまじまじみた後に彼はまた私に詰め寄った。

「じゃあなるべく褒めないように気を使うから」

「ありがとう」

「そのかわりまた、名前で呼び捨てにしてくれるよね？」

その威圧感たっぷりの笑顔に否、と言える人が居るならどうぞ連れて来てください。げんなりしながら彼をみると心得顔で私に向き直っていた。

「……わかりました」

「そう、よかった。じゃあ行こうか。精一杯、俺を見せびらかすと良いよ。そのダイヤモンドと一緒に、ね」

控える三鷹さんにコートを渡して、いつてらっしゃいませという彼の声を背に私と五鹿央さん――柳はパーティ会場に足を踏み入れた。

まぶしい、とそう感じたのは一瞬の幻か、はたまた現にみた白昼夢なのか。

真実は、このダイヤモンドの中に。



烏羽玉の(1)(前書き)

烏羽玉うばたまの。

## 烏羽玉の(1)

居明かして、君をば待たむ  
烏羽玉の、我が暗闇に  
雨が降るとも

「まあまあ、衣幡様がいらっしやるわ。お珍しいわね。ほらしかも……」

「いやだ、わたくし目眩が……なんてこと!」

「どちらの方なのかしら? おみかけしたことないわね」

おみかけしたことはないでしょうに。

万が一以前おみかけられたことがあっても、私は別人で通せる自信があるし。

それにしても、自信満々に「精一杯、俺を見せびらかすと良い」

なんて私に言うておいて、どっちかって言うて私の方が見せ物のパ  
ンダ状態よ。

そしていらいらしながら内心ため息をついたあとに五鹿央さん―  
―柳の顔を見上げるとにこりと微笑みを返されて、それだけでまわ  
りから悲鳴じみたささやきがあがるのだから、もうかえりたい。

「ああ、衣幡さん。珍しいな、こういう場に来るなんて。しかもご  
同伴もいらっしゃるし？　――こんにちは、お名前お聞かせ願えま  
すか？」

「やめてくださいよ、倉田さん。あなたこそこんな席に出るのは珍  
しいだろうに、」

会場に入ってから私たちのことを遠目に見て、話しかける機会を  
伺っていた人たちはたくさんいたけれど勇者にも話しかけてきたの  
はこの人が初めてだった。

そして覚悟はしていたけれど、やっぱり私も名前を聞かれるのか。  
ああ、もう私のことはパンダとでも呼んでくださいませ。

と、ぐるぐる頭の中で愚痴をこぼしているとある事に気づいた。

……この声、聞いた事あるかも？

――……それに、倉田？

ぱっと顔を上げて柳の前に居る相手の顔を確認すると、やはりと  
いう確信を得ることができた。

「恭……？」

「え？　――うわ、花実！　おま、どうした？」

「この格好は……、柳の趣味らしい、けど」

「いや、格好もだけど、いや。それより――このことお祖母様は  
？」

お祖母様と言われると、ひっと身体が無意識に縮こまる。

お祖母様は厳しい方で、かなりその、怖い。それは私たちに愛情があつての事だとは分かつてるから、拒絶はしないし出来ないけど、こうやって言われてしまうと。――せっかく考えないようにしてたのに。

「花実、お前なあ……。貴久たかひさが百合様を説得してお前を大学に行かせてやったのに、なにやってるんだよ。せっかく百合様が表に出さないで丹誠込めてお前を育てたっていうのに」

「恭！ そんなに責めないでよお……。本邸に帰れなくなるってば」

恭を睨んで若干涙目になった私を見て恭がおどおどしだしたのをきっかけにしたのか、それまで黙っていた柳が私と恭に向かって声をかけて来た。

「……花実、倉田さんと知り合いなのか？」

「幼馴染み、兼、ちよつとした親戚？」

それにしても久々に会った恭はかっこよくなっていた。

前に会ったのは六ヶ月前くらい、そのときはパーマなんてかけてなかったのに今はほどよくパーマのかかっている髪が遊ばれてる。色もすこし明るくなった？

うん、すっごくカッコイイ。

「俺の祖父、樹いつきと、彼女の祖母、百合ゆり様は兄妹です。あの、卯月百合が彼女の祖母なんです。旧家名門の卯月家で、政財界にも深く関わる女帝、と言われる方の孫ですよ、彼女は」

たしかに私のお祖母様は卯月 百合。けれどそんな“女帝”とか

恐ろしいものじゃないとおもう。たしかにマナーとかには厳しいけれど普段はすごく優しいし、笑った時のあの目元の皺が私は好き。

ただ私のお母さんはお祖母様の四人の子供の末娘で、その孫の私は特にかわいがられているけれど。なんでも私に割と近しい親戚の中で女の子は私を含めて三人しかいないから、寂しいんだとか。

ドイツから日本に帰化した私のお父さんの名前は橘 アンドレアス。感じを名前に当てた日本名も持つてるけれど、「カッコ悪い」と言ってお父さんはあんまり使いたがらない。

だから私たち、家族の名字は、橘。

「花実、本当に？」

「本当だけど、関係ないでしょう？ 私のお祖母様が卯月 百合だとしても」

「いや、こっちとしては関係あるよ。ありがとう、では失礼します 倉田さん」

ニヒルに笑った柳はなにか危ないことを考えているに違いなかった。……危ない、とはたぶん私にとって危ないという事。

……ぞくり、と悪寒に全身が襲われて。

「花実、ホストにご挨拶にいかがか」

「……はい。あ、じゃあ恭、またね」

「はいはい、またね」

ホスト——主催者に挨拶にいかがか、と言われては断る理由が見当たらないので一旦、恭と別れてさっきからやけに上機嫌な柳と一緒にホストのところへ向かった。

なんで上機嫌なのか私にはよくわからなかったけれど、何かしら

気分が良くなる要素があのかた話の中にあつたんだろうと自分なりに見当をつけて頭の中を切り替えた。

けれどこの時は、私も、恭も、そして柳までもがなにも気づいていなかった。

お祖母様――卯月　百合が整えたシナリオを外れかけているなんてことに、全く気づいていなかった。

「本城さん、お招きありがとうございます」

「ああ、衣幡さん。お越し下さいましたか！　これは光栄ですね」

よくわからなかったけれど、どうやら今度衣幡さんが手がける会社と業務提携する相手会社の社長が今回のホストの本城さんらしい。恰幅の良い社長さんはそれでも、人の良さがにじみ出る笑顔を私に向け安心させてくれる。

「それで衣幡さん、人が悪いなあ。こちらの女性は私には紹介してくださいませんか？」

「――橘　花実と申します。本日はこのような場に来ることが出来て大変嬉しく思います」

柳からアイコンタクトで挨拶を促された私は、ほぼ定型文通りの挨拶を返した。柳が満足そうにしていたから、間違いはなかったはずだ。

「橘さん、ですか。はて、どちらの御家でしたかな？　最近はおうろく

してしまつて……」

「本城さんともあろう方がなにをおっしゃりますか……、彼女、花実は卯月家の血筋なんですよ」

こんな場でうちのお祖母様の名前を出したつて知ってる人なんかいるわけないのに。なんで柳は名前を出したんだろう——？

「ええ！ 女帝の血筋？ 失礼ですが、女帝卯月 百合様とはどのようなご関係で？」

「は、はあ。私の母が卯月 百合の娘なので、私は孫にあたります  
が」

お祖母様の子供は三男一女。だから私のお母さんは特別に可愛がられたつて。それこそ目に入れたつて痛くないくらいに。

お祖母様は厳しい方で有名だったから、そんな人がお姫様みたいに可愛がる娘つて意味で私のお母さんは“百合の姫”と呼ばれていたことがあつたつて、昔話みたいにお祖母様はずつと前に私に教えてくれた。

にわかには信じられなくて、信じていなかった。

だって、あんまりにも現実味がなかったから……——

「百合姫の、娘……？ 彼女は生きていたんですか？ ——彼女は突然、この世界から消えてしまったみたいになくなってしまったから。だから誰もがきつと死んでしまったんだと、まことしやかに噂して、それがいまではもう真実だったのに……——」

「本城さん、このことは“他言無用”ですよ」

柳はにこり、とやっぱり寒気のする笑顔を目の前の人に見せた。

その意味深な口調と表情で私が柳の真意を知る事は出来なかった。  
それが出来たのはもっと後になってから。

けれど、柳のこの言葉に激しい嫌悪を感じたのははっきりとした  
事実だった。



## 烏羽玉の(1) (後書き)

冒頭の古文は、万葉集(2－89)より、引用・改変しております。

## 鳥羽玉の（2）

\*\*\*

日本における五鹿央家の起源は諸説ある。

本流はエジプトとも、イギリスとも、説が多数あり絞りきれないとも言われるが、実際はローマ帝国の時代から続く。

ローマ帝国皇帝トラヤヌスが元老院と協力して内政を安定させ、対外進出をはかったことは有名である。その時代に帝国の版図は最大になった。しかしそれだけではなく現在の中国地域へも進出をはかっていた。ゆえに五鹿央家の祖先をそこへ派遣した。

命に従い、五鹿央家の祖先は中国へ行き土着をはかったが失敗し弾圧を受け、中国のさらに先にある半島、さらには島国へのがれた。そのころにはもうとくにローマ帝国との連絡は絶たれていた。

これが約五世紀ごろのことだ。日本ではヤマト政権が争いを繰り返して広がっていたころである。そこへ五鹿央の先祖は馬具や武具を伝来させた。

五鹿央の先祖は独自に進化をとげ、日本への土着に成功した。様々なものを与えた彼らに当時の日本の権力者たちは依存し、教えを請うようになった。

表からは見えない角度で五鹿央の祖先たちは発展をし続け、常に裏から時代の覇者たちをあやつり続けた。

——つまりは、天皇家を操っていたのだ。

五鹿央。その氏の音は元をたどれば“花押”に行き着く。

天皇家はなにをするにも五鹿央の祖先の指示をあおいだ。彼らはなにかを決めるときに必ず最終的には五人の署名を並べ、それを通じて朝廷に指示を出していた。

ローマの文化を色濃く受け継いでいたその署名の文字は日本人々にはただの記号にしか見えなかっただろう。

朝廷はその記号とも見える署名のことをいつしか花押と呼ぶようになり、“五つの花押を下す者”と彼らは呼ばれ、今日の五鹿央家の原型となった。

決して表には出てこない一族。

その一族は代々生命力溢れ、長寿のものが多いという。

それ故にいままで血筋が絶える事無く続く事ができたのだ。

いまでは五鹿央家は世界でもっとも由緒ある家系のひとつである。

「柳様、よろしかったのでしょうか？」

「なにが、だ？」

三鷹は思う。分かっているくせに、と。

「花実様のことです。……女帝が全力で表世界から護っていらしたのに、あなたはいとも簡単に彼女をこの世界に引きずり出した。それもしか、中心とさえいっても過言でない、あなたの隣に」

「女帝にも、百合姫にも申し訳ないとおもう。けれどそれとこれとは話が別だ。花実が俺のとなりに立つためには、必要なことだから」

そうやって言っただけの人だから、ついでに行こうという気になれる。そんな風に見通す力のある、あなただから。

「三鷹、総理大臣に紙を送ってやれ。内容はお前が書いてかまわない。そろそろ——中国が動くだろうと」

「かしこまりました」

ぞんざいにそう言い放った彼は直後電話をとる。ついこの間、アメリカ合衆国では大統領選が行われ新しい大統領が決まった。その祝いの電話をいれるためである。

しかしその電話は中断された。

彼の携帯電話が鳴ったためである。いつもなら緊急でもない限り彼の携帯電話はなることがない。だいたいは三鷹を通して用件を伝えるためである。

しかし彼はその鳴った携帯電話を彼はとった。

「——なんだい？ 花実」

その表情は至極幸福そうである。しかしそれは当然というものである。

なんといったって彼のたったひとりの思い人からの電話なのであるのだから。

「明日、だね。分かったよそうする。——ああ、じゃあ」

十五分ほど電話していただろうか。

柔らかな声音で電話を切った彼に告げなければならぬ事柄を持って来た三鷹は声をかけることに幾ばくかのためらいを感じた。

さてどうしたものか、と三鷹が思案していると珍しく柳の方から彼に声をかける。

「なんだ、カイル？」

「はい。あの、U・S・S・Rの大統領が……」  
「ああ、」

アメリカ新大統領は柳の電話を受けるために分刻み、時には秒刻みになる激務のなか十五分をあけていたのだ。その十五分をひねり出すのがいかに大変なのか、柳のスケジュールを管理する三鷹にはよくわかる。

そして柳からの電話はどうもかかってこなかった。

普通だったら怒ってもいいのかもしれない。けれど今度の大統領はどうやら心配性だったらしい。もしかしたらなにか過ちをおかしたのかと、代々五鹿家の権力者からの祝いの電話がなかったことなどないのだから、それは不安になっただろう。

「柳様が電話をおかけにならなかったので、“なにかこちらに落ち度があったのだろうか”と私の方に問い合わせの電話がありましたので、適当に理由を付けておきました。また、手紙を送るとも」  
「そうか、花実と電話していたから……」

まさか花実は想像できないだろうに。自分が電話をしたおかげで一国の大統領が十五分ひやひやしながら待たされたことなど。普通に考えてありえないことなのだから。

いまだカイルさえ目の前に居る人物の大きさを実感できない。そうずっと一緒にいる彼でさえ、だ。ついこの間知り合ったばかりの花実がこの大きさをすぐに掴む事ができたなら、カイルは自信喪失するに違いない。

しかし、花実のことも実はこの目の前にいる人物と同種なのではないのかとカイルは思っていた。はっと目を引くけれどその実態はなによりも儚く、掴む事ができない。無理をして掴もうとするならば、崖から落ちてしまうのではないかという不安感。

その潜在的に秘める大きさ自体は同じだろうけれど、彼らふたりの間には決定的に違うものがあったのだ。真逆ともいえる、その要因。おそらくそれが目の前にいる男が花実にひかれる要因なのだろうとカイルは何となく気づいていた。

そんな中、慌ただしく別の部屋にあるカイルのデスクから慌ただしく電話の音になっているのが聞こえた。直感的にこの音にいつもは感じる事の無い気配を感じ、カイルはすばやくその電話をとった。

## 烏羽玉の(2) (後書き)

さてちよつと一息。

この五鹿央家発祥の説、なかなか考えたんです。

世界史の教科書ひっぱり出して唸っていると、あらあら繋がったあ

！ と私の苦勞が報われたので、この物語を書く決意をしたのです。

本当は大仙陵古墳の話も書きたかったんですけど、諦めました。

さすがに殴られそうだと思って。

なにはともあれ、一段落つきましたー。よかったよかった。

トラヤヌス帝(53年9/18－117年8/9, 在位98－117年)

五賢帝の二人目、その生涯の大半を外征に費やしローマ帝国の版図を最大にした。属州出身者ではじめて皇帝になった。

## Detrimental (1)

五鹿中央に不利益な状況を歴史に残せば、日本に住みづらくなる。

それはなにも今に限った事ではない。それは江戸時代も、明治時代もいつでも同じだ。

しかし明治に入り第二次山県有朋内閣によって軍部大臣現役武官制というものが施行されてから、内閣への五鹿中央の影響力は目に見える形で衰えて行った。

それというのも、当時の内閣は五鹿中央の影響力からの脱却をはかりたかったのである。太古の昔から五鹿中央の支配下に置かれて来た日本ではなく、明治維新を果たした新しい日本はそのようなものからも脱却しなければならぬ、という思想が内閣の中にあったのだ。いや正確に言えば、伊藤 博文にあったのだ。

話をもどし、“軍部大臣現役武官制”というもののどこに五鹿中央の影響力を削ぐ効果があったのか、といえどそれは“軍部の偽りの無知”という部分である。

大臣は欠けてはならないということは決まりとして存在する。だから軍部大臣も常にいなくてはならないのである。しかし軍部大臣はこう言うことが出来るのである。

『いや、私ではなくて、このままでは下々の軍人たちの統率が取れ



ないのです』

あの法律によって軍部大臣に成れるのは中将、大將以上だけである。そして彼らにも多少の知識として“五鹿央家に逆らってはいいない”という認識はある。けれども彼らには内閣によって作り出された建前がある。結果的にこの建前が五鹿央の影響力を削ぐ大きな力になったのだ。

——内閣が裏で操った軍部の意見が五鹿央家に認められなければ大臣は辞任、そして新しい軍部大臣を出す事を渋る。こういった循環が生まれ、とうとう五鹿央家はほとんどその影響力を削がれた時期があったのだ。

そして影響力を失った五鹿央家本流の者はイギリス北東部スコットランド、エジンバラにひっそりと、親交のあったイギリス王室を頼って逃げたのである。

そう、内閣は思惑通り現代では悪法と名高い“軍部大臣現役武官制”のおかげで五鹿央家の影響力を国内から排除する事に成功したのだ。

しかしそこは悪法である。これだけではすまなかった。

五鹿央家の本流が国外に逃れた時点ですぐにこの悪法を撤回するべきだった内閣はそれをしなかった。だから——軍部がこの法の重要性、そしてかぎりなく自分たちに都合がいいのだということに気づいてしまった。

そしてさらに悪い事には五鹿央家が居なくなったことによってそれまで五鹿央の支配下にあった財閥が金儲けの争いを始めてしまったのだ。やがて彼らは戦争が金儲けに最も適した環境だと気づき、軍部を支援し出すのだ。

よってこの後に軍部は現代国民の知る通り、破滅への道をひた走ることになるのである。

なにが言いたいのかといえば、——このことが二十一世紀における日本政府の異常なまでの五鹿央家への依存を引き起こしている、ということだ。

当時の内閣が五鹿央家の影響力からの脱却を図り、実行した途端に日本が傾き始めたのである。戦後の政府が代々そうなることも当然のように思えた。現代日本は統率力に欠ける、とマスコミは騒ぎ立てるがそれはある意味によりも的を得ているのだ。

日本の内閣は戦後からたとえ政権交代をしようとも、大きな問題に直面した時——特に外交分野においては必ず五鹿央家の当主、またはその側近に意見を求めるし、それ以外の事もどんな小さな事であっても五鹿央家の判断を無視することは出来ないのである。

「くそっ、なぜよりもよって“今日”なんだ！」

「すみません、今回ばかりは私だけでは対処しかねますので」

平素ならば所謂“内閣のお伺い”というやつはほとんどカイルだけで対応している。なぜならそれほど重要な案件というものが柳が事実上の当主についてからあまり無かったためである。あったとしても中国外交でのいざこざくらいである。

しかし今回は違った。無視できない規模の問題だったのだ。そしてこればかりは五鹿央ですら手が出せるかどうか怪しいのである。

——日本の目と鼻の先。北朝鮮の問題であった。

すでに体制の崩壊寸前である北朝鮮はそれでも自国を維持したかったし、なによりもアメリカと対話を望んでいた。いつ攻めて来るやもしれないアメリカとの対話はいつの時代も北朝鮮の外交において最重要項目である。

そのアメリカが韓国との軍事演習を長期にわたって北朝鮮と韓国の軍事境界線近くでするというのだ。それに北朝鮮が反発しないわけがない。

その反発の仕方がまずかった。

その反発の仕方、が今回柳のもとに舞い込んで来た処理案件の中心だった。

「——なんで、よりにもよって今日なんだ！ 今日でなく明日ならまだいいものを、なんで……今日なんだ！」

北朝鮮の反発の仕方。それは朝鮮戦争の休戦協定を破ったの攻撃であった。

あわやアジアのハブである仁川インチョンにも被害出ていたかもしれないという極めて深刻な問題のそれは、当然五鹿央家の意見を仰ごうという内閣の意思のもと直ぐさまカイルのへと繋がれ、いま柳の知るところになった。

しかしそれよりも前に韓国大統領府からカイルに報せが超緊急で来ていたため、日本の“お伺い”にも激しい動揺はなかった。

さて、とひとまず心を落ち着けて柳は考える。

北朝鮮の後ろには第二次世界大戦後すぐ勃発した朝鮮戦争と変わ

らずに、大国のロシアと中国が構えている。今回の仁川周辺を狙った砲撃にその両国は関わってはいないだろうけれど、もし休戦協定が破られるようなことがあるならば、当然アメリカは韓国側に、ロシアと中国は北朝鮮側に付き、国際連合の常任五カ国内での代理的な戦争が起き——あとはもう、歴史は繰り返すの法則だろう。

今回もどうせ世界の注目を引きたい愚国のパフォーマンスだろうことは分かるのだから、と柳はおもむろにカイルへと視線を向けた。

——日本政府への指示は、「慌てず騒がず、大事にしない」だ。

柳の意思を汲み取ったカイルはPCを少し触ると頷いてみせた。

「どうぞ、安藤首相へ繋がっています」

柳はその言葉を聞くと、顔の前で手を組んだ姿勢でデスクに座ったまましゃべりだした。

「それほど大事おおいとにしないように。主要各国へは通しておく。マスコミに何を言われようと対応はせずに、情報収集に努めているとだけ言っておけ」

いま、ここでくだされる決断。

それがどれほどの力をもつものなのか。それを理解した上で、平然と言葉を発する柳にいつまでも畏れを抱くカイルがおかしいのか、それとも雑作も無いことのように一国の頂点として決断をすぐさま

下す柳がおかしいのか。

その答えをくれる存在は、ここにはいなかった。

## **D e t r i m e n t a l ( 1 ) ( 後書き )**

たぶん小難しい話は一旦ここでおわりです。たぶん。

ちなみに仄馨の中の出来事は、ほとんど現実と通じてます。

ちなみに柳さんが社長の車会社のミナモも、画数が八画で末広がりのアノ会社をモデルにしています。

## Det r i m e n t a l (2)

なんだったんだろう。

パーティのホストである本城さんという方にご挨拶をしてから、私に集まる視線の数と威力が段違いで強くなった。入った瞬間からすでにたくさんの視線をもらっていたけれど、それとは比べ物にもならないそれ。嫉妬、嫌悪、時折混じる値踏みするようなそれ。

なんだったんだろう。

ホストにご挨拶をする前は“私”に言葉をくれる人なんてこれっぽっちもいなかったのに。ご挨拶をした後では柳に挨拶に来た人はすべて私にも言葉をかけてくる。――――表情の無い微笑みと一緒に、ナンセンスな言葉を私に送る。

その意味の無いばかげた言葉を送りつけられると、どうしてもなく吐き気を感じた。胸がもやもやする。胸焼けがひどい。

「花実？　どうかした？　気分が悪くなった？」

「……柳、かえりたい」

そのたくさんの人々から送り続けられる空虚な笑みに、心をえぐられる感覚を覚えた。

どうしようもない嫌悪感、そしてよくわからない浮遊感。

置いてある料理もおいしいし、話しかけてくる人は私が退屈しな

いような話題を振ってくれる。でもこのパーティ会場だけなにかがおかしいの。

たくさんの方がいるのに、柳に触れていなければ自分がここにたった一人ではいるのではないかと錯覚させられる。正直に言えばよくわからない。

だけど、この場を包む一見きらびやかで華やかな空気は、触れるととても冷たくて私を凍らせる。

本当に具合が悪くなったのではないかと考えるほど不気味で、身震いがする思いだった。

「わかった。じゃあ帰ろうか」

柳の言葉に無言で頷く。一刻も早くこの場から立ち去りたかった。なにも悪いことなんてしてないのに、どうしてかそわそわしてしまっているのはなぜなのだろう、と関係のないことばかり考えて私は無意識に心を閉ざした。

閉ざしていなければおかしくなってしまう、と本能で感じ取っていたからだとおもう。

出入り口に歩きながら、まわりの音が聞こえないように耳を塞ぐ。

あの、言葉を聞きたくないと私が叫んでいた。

「おや、百合姫のお嬢さんはもうお帰りになるらしい」

「まあ、女帝のお孫さん、ご気分が優れないのかしら？ 心配だわ」

私は、私が鏡を見て、その鏡に映り込んだものを“私”だと認識



する。そこにあるのが私の姿で、みんな自分のまわりにいる人がそれを“私”だと理解しているのだと思っている。

けれど、なんで、どうして此処にいる人たちは、私を私と見てくれないのだろう。此処にいる人たちには、私が鏡で見た“私”とは違う”私”を見ているのだろうか。

ここにいて、いままで生きて来た中で積み重ね作って来た“橘花実”という私が音をたてて崩れて行く気がしてならない。自分がなにを考えているのか、自分でもわからなくなってしまう。

いままでの私が、否定される感覚。

人間は理解されて認め合って生きているのに、それを根本からあの空間は否定しているような気がする。粹からはみ出した人間を、人間とも思っていないような輩がいるから。

だから、嫌悪感を感じるのかもしれない。

そんなことを考えて知らない間に車に乗っていた。

手触りが良いシートを何回かストロークして、車の窓から夜空を見上げる。星が見たかったのに、ひとつも見えない。

ああ、やっぱりおかしいの。真っ暗よ、真っ暗。何も見えない。電気のひかりさえ見えない。私はやっぱりおかしいのかもしれない。

———なにも、見えないなんて。

「————…さね、花実！」

は、っと気づいたときには私は自分のマンションの前にいた。どうやら柳と一緒に車でパーティから帰ってきたらしい。

でも私にはどこからが夢で、どこからが現実なのか判別できなかった。もしかしたら全部夢なのかもしれない、と少し笑った。

自分の着ているドレスの色がどうしようもなく滑稽に見えて、悲しくなる。でも同時に血の色のように不気味にもおもう。これが現実でも夢でも私には大して関係ないし。だって今日、あの時間だけの出来事だもの。

あれはすべて夢の中の出来事。

ひととき、私はおとぎ話の端役になっていただけのこと。

「……なに、柳？」

「いや、なんでもないよ——それより今日は連れ回してすまなかった、ゆっくり休んで」

車のドアを開けて降りると、旋毛つむじのあたりにキスをおとされた。すこしだけなにか暖かいものが内側に流れた気がして、ふう、とひとつ息を吐いた。身体から何か重たいものが出て行く感覚を指先から感じて、緊張がほぐれた。

私が車から出て、見送ると柳に一言告げると急いでいるのか柳はすぐに車の後部座席に乗り込んだ。

「柳、……送ってくれてありがとう。カイルもありがとうね。じゃあ」

「では、花実様。失礼します」

カイルがドアを閉めて運転席に回り込む、その間にスモークの張られた車のガラス越しに柳の顔を見ていた。スモークのせいでかすんだようにしか見えないけれどなにか、考え込んでいるのだろう様子が分かってすこしおかしい気持ちになった。

——だっておとぎ話の王子様は顔を顰めるなんて、そんなことしないもの。

数秒すると滑るように車は発進し、すぐその道を左に曲がった。すると同時にさっき柳が私の頭にキスを落としたときの比でないほどの安堵感が私を襲った。何を気張っていたのだろう、と私に苦笑を漏らさせるほどに唐突なそれにどうしていいのか一瞬わからなくなった。

一体なにが私の心をこんなにも縛っていたのか。

柳という時に、なにが私をこんなに疲れさせるのか。

考えれば考えるほどわからなくなるようにみえて、実はそれほど難しくないようにも思える。

そう例えば、寝かしつけた小さな子供を起こさないように静かに立ち回るような感覚。起こしてしまったなら、きっとその子供は泣きわめく。そして私はまた寝かしつけるために両手を塞がれる。

そんな危ういバランスを、柳から感じるのかもしれない——

「花実」

「っひゃああ！——っもう、恭ってば驚かさないでよ」

ぶるり、とコートを羽織ってる背中が寒くなってマンションの中に入ろうと身体を動かした瞬間に耳慣れた声を掛けられた。

さっきもあの異常な空間で聞いていたこともあって、その声の持ち主を恭だと断定するのに時間はかからなかったけれど。

「おい、はやく中入ろうぜ。寒みい」

「ちょっと……、なんでここにいるの？」

「それを話すから中に入ろうって言ってるの」

空を見上げると、星が見えた。だから文句を言いながらも安心してマンションのエントランスに恭と一緒に入っていった。

## **D e t r i m e n t a l ( 2 ) ( 後書き )**

おひさしぶりです。

仄簪、更新お待たせしています。

## Detrimental (3)

そもそも、私は高校三年生のときに進路を悩んでいた。

女子校に通っていた私は、共学の大学に強い憧れを抱いていたし、なによりそこその進学校だったため、まわりは皆将来の夢を見つけるために“とりあえず大学へ行く”という選択肢を選んでいた。

とりあえずとかいう言葉は本当に便利で、でも残酷で。次のステップへ進んで何をする目標もないのに、“大学へ行くということ”が目的だという錯覚を起こす。

なにをするのかを見つけるためにとりあえず大学に行くんだよ、という友達の言葉に私はなぜか感心してしまって、だから、私も当然とりあえず大学へ行くのだと思ってしまっていた。

でもただ、心になにかわだかまりがあるのは自分でも分かっていた。

だから周りが続々と志望校を決める中、私だけがそれすら決められないでいた。

もしかしたら本当の意味でそうやって心を宙ぶらりにしていたのは、私だけだったのかもしれない。

『花実、大学へ行くことを許すことは出来ないわよ』

『——っ!? どうして、お祖母様! 私——っ』

『お前にはなにか、大学でしか出来ないやりたいことがあるのかい?』

すべてを見透かされた気分になった。

その瞬間に私は理解するより早く、お祖母様は「とりあえず」という言葉が大嫌いだったと思い出した。だから私のお稽古や、礼儀作法はすべてお祖母様が納得するような出来になるまで、何回でも練習そしてやり直し。けれどそれ以外私に優しくかったお祖母様が、私は大好きだった。

優しいお祖母様だから。

だから、大学へも行かせてくれる、なんて考えていたことが恥ずかしくなった。

なんでも一生懸命にやっていたつもりだったのに、どうして私はそんな風に考えてしまったのだろうと私は自分自身に嫌悪した。

母や父、そしてお祖母様のようになにか自分を持っている人になって、少しでも良いから他人とは違う道を歩いて行こうと考えていたのに、どうして私はそうやって考えていたのだろうと、その思いを厭悪えんおした。

それなりの、ありきたりな人生を歩もうとしていたのだろうか、と、理由もよくわからずに大人として歩こうとしていたのだろうか  
と私は悩んだ。

『つまるところ、お前は“一生懸命にやっていたツモリ”で“理想に憧れていたダケ”だったってことだろう？ そんなじゃお前のお祖母様は許してくださらないぞ』

『—————ねえ貴久、私……大学でやってみたいことが出来たの。それはね……絶対に中途半端で終わらせたくないの。もう、遅いか

なあ』

やりたいことが出来た。ミナモの社長のおかげだった。

だれかの未来を決める手伝いをしたくなった。だから大学へ行き  
たくなった。

なにも知らない世間知らずなままでは何も出来ないって分かった  
から。

もう遅いかもしれない。でも浪人したって私は大学へ行きたい。

『遅くない、ぜ？』

いまでも頭から離れない。私の言葉を聞いたあとにニカリと笑っ  
た貴久の顔が。

あの嬉しそうな、それでいてなにか私を見守るようなそんな目と  
顔。昔から兄のように慕っていた貴久の、その顔を見たときに。

その瞬間、どうしてかわからないけれど泣きたくなって。背中が  
足が、手が、全身が震えた。

『我慢すんな、ほら。泣け』

そう言って貴久に二回頭を軽く叩くように撫でられたら、もう止  
めることなんて出来なかった。尽きることがない滝のように溢れる  
だけ溢れ、流れ、流れ。

泣き過ぎて疲れたのか目の前がだんだん白くなって来た私は、そ  
れに逆らうことをせずに意識を手放した。

なにかうつとりとした気持ちのなか、私は心地の良い眠りを貪り  
欲した。幼い頃から慣れ親しんだ香りが私を癒していたのは疑うす  
べのない、事実?????



その事実から抜け出て覚醒したとき、私がいたのは貴久の部屋のベッドの上だった。そしてもう、すべてが終わりを迎えていた。

『花実？ 起きたのか？』

『……恭、貴久。今なんじ？』

『バーカ、お前ひとりだけ呑気だな。いま貴久が百合様と大ゲンカしてきたっていうのに』

お祖母様と、貴久が、ケンカ？ なに、どういうこと？

起き抜けで頭がよく働かない。目の前の真実に濃い霧がかかり、そこまでの距離が測れない。

『俺はお前が本気でやりたいならそれを応援する。それだけだ』

『なに？ なに貴久、恭？ 分かるように説明してよ』

そしてその数十分後、私はすべてのことを把握することができた。私のために貴久がお祖母様に掛け合ってくれたのだ。

——花実はやりたいことを見つけました。百合様の意思でそれを潰してしまい、花実から未来を奪うのはいくら貴女でも許されないことです。

「で、おまえはどうする気なの？ 貴久になんて言う気なの？ お前のためだけに百合様へ啖呵切った貴久を裏切るようなことして？」

「…………でも、柳に、五鹿央さんに恭は逆らえるの？ 無理じゃないの？」

だって彼は私に話をして、逃げられないように脅した。

“五鹿央に逆らえば、それは直接日本に住みづらくなることを意味する”というその彼の言葉を証明する方法はないけれど、なぜかそれがもつ真実味は一点の曇りも無い完璧なもののように私には感じられる。

だからその脅しを聞いたときに私が思ったのは…………家族への影響だった。私だけが脅威を受けて虐げられるのなら良いけれど、それが“私だけ”に向けられるという保証がないもの。

私が起こした火種でついってしまった火が、炎となって親しい人に降り掛かるなんて耐えられない。耐えられるわけがない。

お母さん、お父さん、お祖母様、お祖父様、そして恭や貴久…………私にとってかけがえの無い人たち。

万が一、考えたくもない事態がその人たちを襲ったらと思うと…………どうしたらいいのか分からなくなる。

「おいって、そんな泣きそうな顔すんなよ…………まったく」

まったく、って息を吐きながら恭はソファに座ってる私の隣に来て、背中をゆっくりとさする。それと同時に涙はひいていくけれど、溜まっていた涙が一筋だけ落ちた。

その滑り落ちた涙の跡を恭は消すように私の頬を親指で擦ったあと、なにかに気づいたように一言、私に発した。

「???おい待て、……五鹿央って？ おまえ、なんでその“名前”知ってるんだ？」

「????……だって、」

そこまで発してからはと思った???これは言っているのかと。でも眉間に皺が見る見るうちに寄っていったから、私が言う言わないに関わらずどうやら恭は自ら答えをはじき出したようだった。

「五鹿央、あの化け物一族が食えない奴<sup>あいつ</sup>の。道理でな」

「恭……あの」

「ああ、口止めされてたのか？ ???いや、大丈夫だろう。俺とお前が親戚関係だと分かった時点でお前に再度忠告しなかったんだから。俺に伝わるってことは百合様に伝わるってことだろ？ それは直接百合様を敵に回すということを意味する。それを気にしなかったんだから……」

そのあととはぶつぶつとなにかを一人で話していた。私を視界から閉め出して。

こうなってしまうと何を言っても無駄だと私は知っているから、ゆっくりソファから立ち上がってコーヒーを淹れることにした。

私の気に入ってる真っ白な部屋。それから二人掛けの真っ赤なソファ。ガラステーブル。この私が住んでいるマンションに恭がくるのははじめてだから、なんだかいつもの見慣れた風景に彼がいることに違和感を感じる。

なのに自分の世界に入り込んでいる恭に苦笑した。

## **D e t r i m e n t a l ( 3 ) ( 後書き )**

平行して水端の姫君という小説を更新しています。  
お暇な時にでも覗いていただければ幸いです。

いつもお気に入りや評価、ありがとうございます。  
わざわざサイトを探して感想をくださる方など、本当にありがたいです。

この場をお借りしまして、お礼を申し上げます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0649p/>

---

仄馨

2011年2月5日16時32分発行